

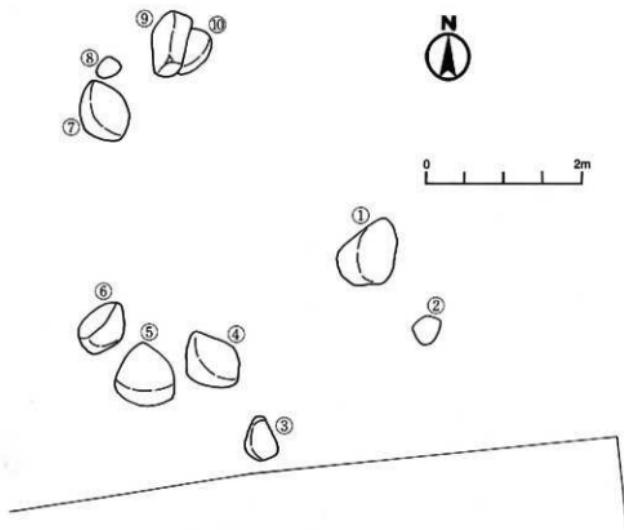
*縮尺の縮尺比を加工した。

表21 中央配石観察表

番号	長さ (cm)	幅 (cm)	面積 (m ²)	敲打痕		研磨痕		備考
				有無	部位	有無	部位	
①	70	60	1.8	×	—	×	—	
②	35	37	0.32	×	—	×	—	
③	40	55	0.6	○	平坦面上	○	平坦面上	敲打→研磨。研磨によりフラットになる。
④	65	65	1.39	×	—	○	平坦面上	研磨は、縦の面に沿って丁寧に行われる。
⑤	75	80	1.57	×	—	○	平坦面上	研磨は、縦の面に沿って丁寧に行われる。
⑥	55	57	0.94	×	—	×	—	⑤と同一個体
⑦	62	70	1.29	×	—	×	—	
⑧	30	25	0.19	×	—	×	—	
⑨	45	85	1.18	○	稜上	×	—	
⑩	—	55	—	×	—	×	—	

表22 坂穴状遺構観察表

番号	長さ (cm)	幅 (cm)	面積 (m ²)	出土遺物										推定 時期	備考
				I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	VIII	X		
SK-02	476	452	7.9						1	1	4			VII	
SK-03	874	730	24.24							3				VII	台付皿4
SK-04	474	388	6.64				1			1	2			VII	台付皿1、縄文早期1
SK-05	730	596	16.04		1	3	2			5	3	5	2	VI～VII	台付皿4



第64図 中央配石実測図

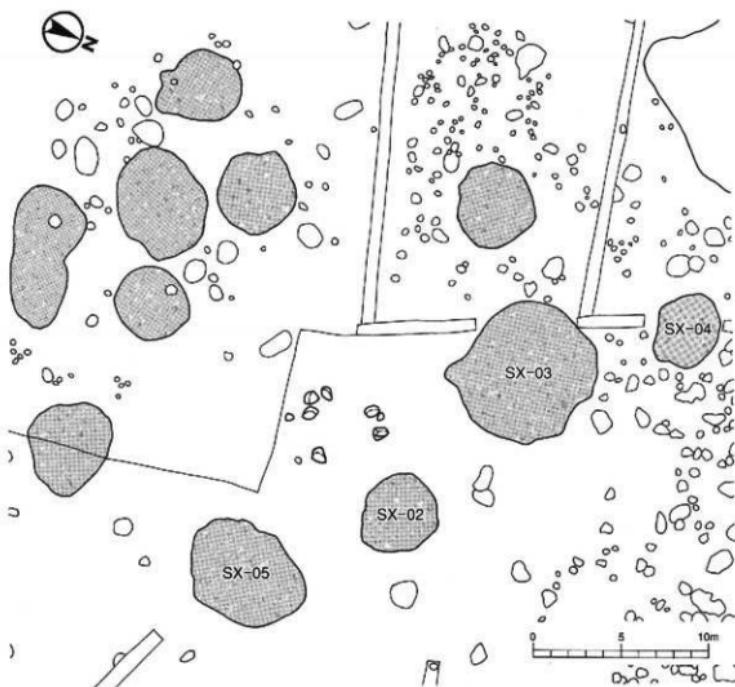
中央部で15cm程度であり、遺構底面は早期ローム層下位の粘質土層に達していた。

(SX-05)

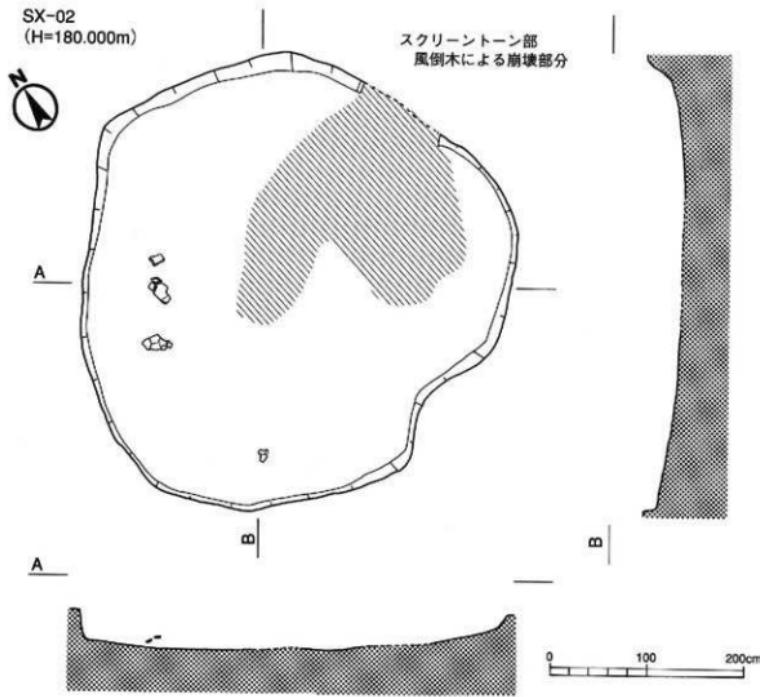
C区南西部、中央配石の南東で検出した。長軸750cm、短軸600cmのやや亜な楕円形を呈する。遺構内にはピット上の落ち込みを検出した。覆土中より台付皿形土器を4個体出土した。遺構の深さは中央部で15cm程度であり、遺構底面は阿多火碎流に達していた。

環状土坑群

C区南部は、多くの土坑が検出された。この範囲内には、一定の大きさと深さを持つ土坑が252基、小型のピットが283基分布する。土坑の分布は、整地遺構の内に集中する一方、遺構中央部は希薄であり、おおよそ径50~70mのドーナツ状を呈する。これらの土坑やピットは深さ、大きさ、平面形態、断面形のいずれにおいても多くのバリエーションが認められたことから、幾つかの機能を持つ土坑が混在していたと考えられる。なお、C区南部においては検出作業がまだ不充分であったために、実際は更に多く分布していたと考えられる。



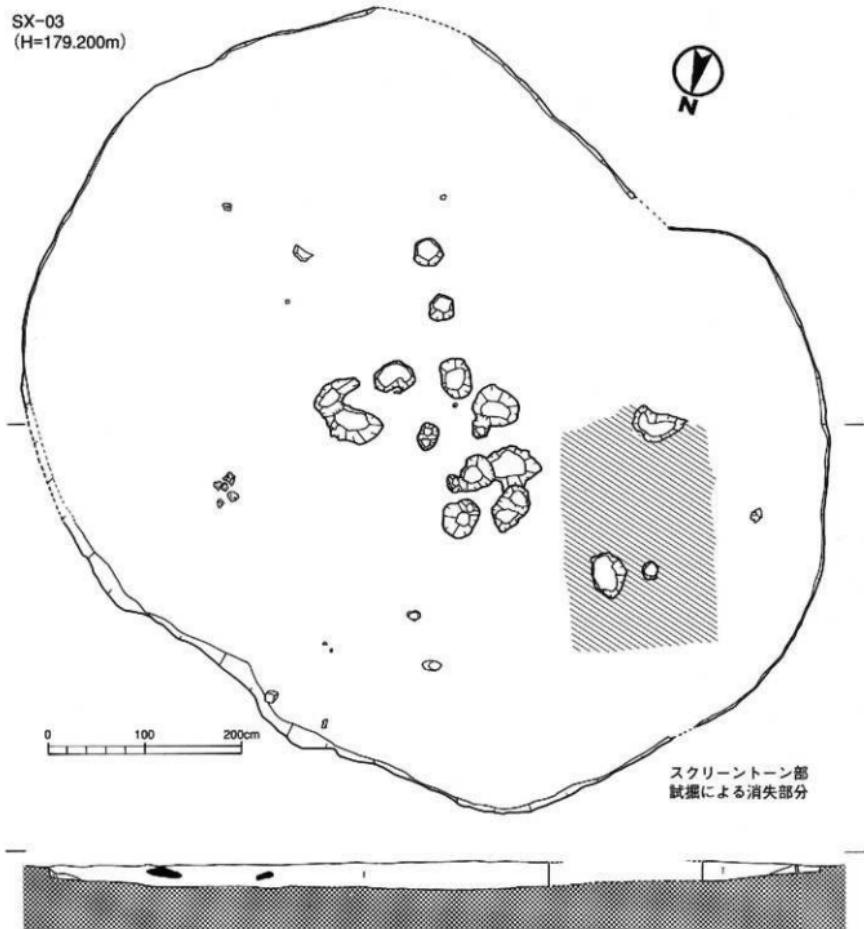
第65図 塚地遺構中央部遺構分布図 (スクリーントーン：竪穴状遺構)



南東部土器廃棄場

第66図 竪穴状遺構実測図(1)

C区南東部は、本来湧水点に向け東側に傾斜していた地点であるが、この周辺は縄文後期の遺物包含層が分厚い堆積が認められた。堆積層は上下2層に分層が可能である。御池火山灰層上位で認められた黒色土は、調査区東壁で約30cm堆積し、後期前葉の指宿式・岩崎式を中心として、残存状態の良好な土器が高密に出土した。また、その上位の茶褐色土も、黒色土と同じく約30cm堆積していたが、早期ローム層や粘質土層のブロックを多く混入しており、出土土器は比較的小片が多く、指宿式・岩崎式を主体としながら、後期後葉の丸尾式に至るまで、幅広い時期が確認された。



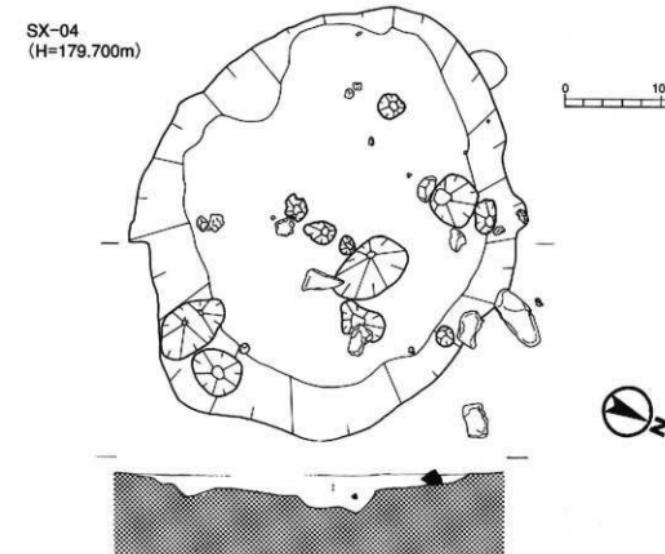
I層 10YR 黒褐色 3/2 層はやや縮まっており(硬さ:6)、粘性は殆どなし。層中には、炭の小片を少量、白色粒子を少量、れる赤色粒子を少量、阿多火碎流に含まれる赤変した小ぶりの角礫を少量、阿多火碎流漸移層の5mm大のブロックを微量、粘質土の粒子を中量含む。

II層 10YR にぶい黄褐色 4/3 層は軟質であり(硬さ:4)、粘性に富む。阿多火碎流漸移層の2cm大のブロックを中量、粘質土の粒子を中量含む。下層のブロックの隙間に、I層が入り込んだ恰好である。

第67図 穴状遺構実測図（2）

SX-04
(H=179.700m)

0 100 200cm



I層 10YR 黒褐色 3/2

層は軟質であり(硬さ:4)、粘性あり。層中には、2mm以下の粘質土の粒子が多量、スコリアを少量、焼土と思われる赤色粒子を微量、後の小片を少量、御池火山灰とは異なる白色粒子を少量含む。層の堆積に斑紋は見られず、床面との境界は鮮明である。ただし、住居の床面のようは平坦面は見られず、硬化面もない。

第68図 積穴状遺構実測図(3)

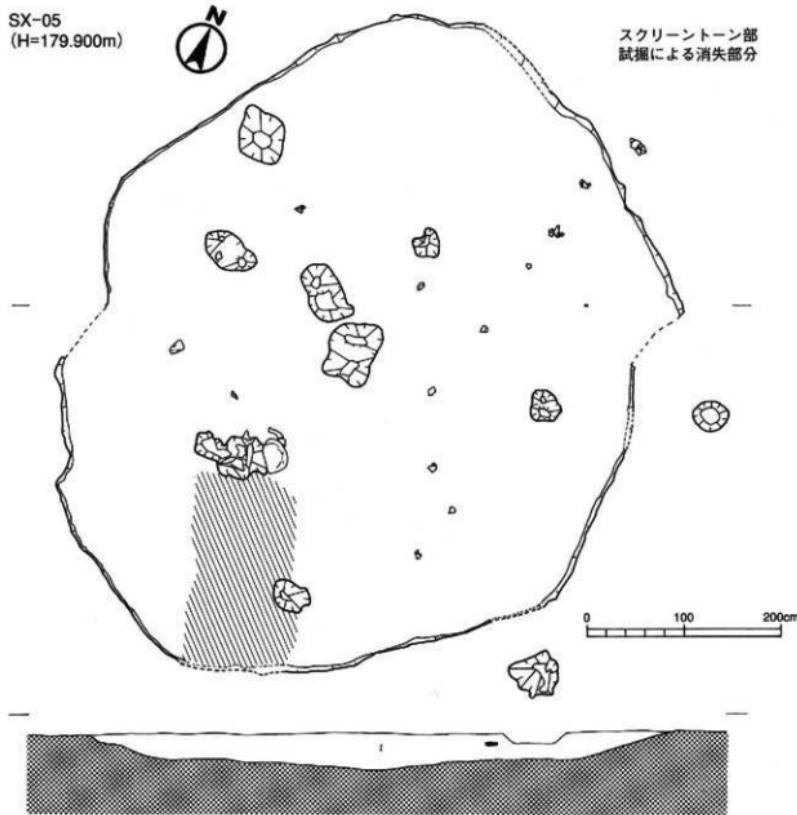
道路状遺構

2箇所検出した。

(道路状遺構-01)

C区北西部より、幅約10m、長さ約20mに達し、北部が調査区境界に接する落ち込みを検出した。調査の結果、アカホヤ火山灰層、牛のスネローム層を削って、早期ローム層で平坦面を形成することが確認された。土層断面の観察から、上層と下層に分層が可能であり、上層は軟質の黒色土であるが、下層は黄褐色土であり、著しく硬化していた。また、上層と下層の中間には、部分的に牛のスネローム層のブロックが確認された。上層は更に上位と下位に分けられ、上位の出土土器は残存状態の悪い小片が多くったが、下位は納曾式及び納戸向タイプが良好な状態で出土した。なお、遺構の延長を探るためにG-7トレーニチを設定したところ、調査区内ほど明確な落ち込みではなかったが、東側に下層を切るような土層堆積が認められた。この部分の底面にも、部分的ながら牛のスネローム層が検出されたほか、床面に若干の硬化が認められたことから、道路状遺構の延長と考えられる。(道路状遺構-02)

F区西側に設定したG-6トレーニチの断面で認められた。遺構はアカホヤ火山灰層から

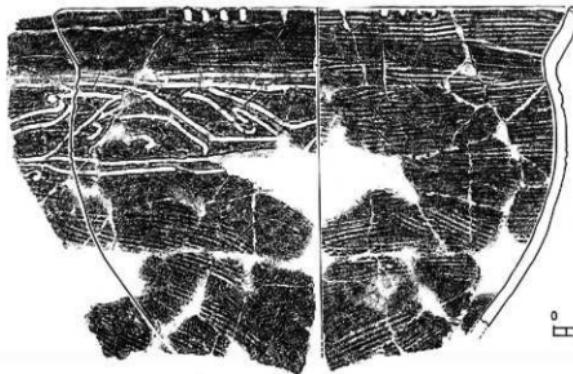
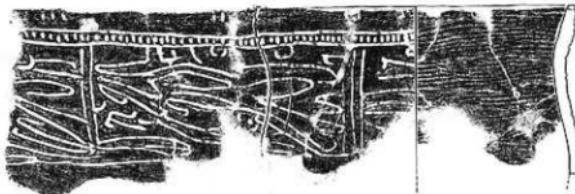
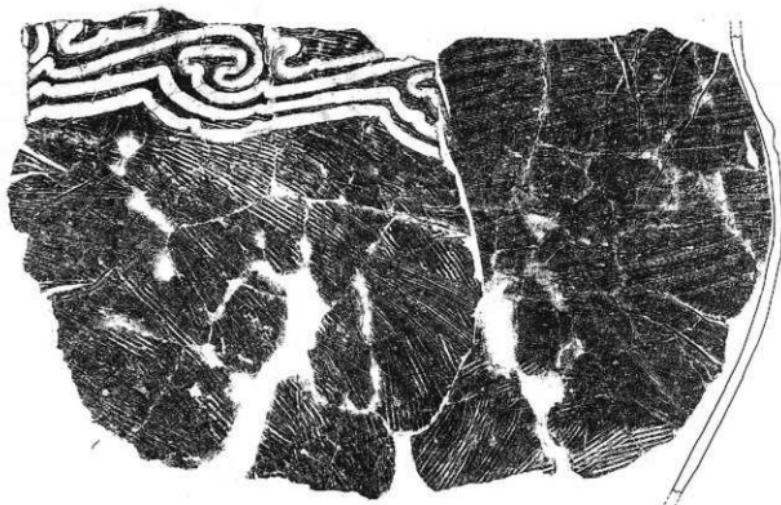


I 層 10YR 黒褐色 3/2

層は軟質であり、粘性あり。火山ガラスを中量、炭の小片を少量、焼土と思われる赤色粒子を微量、焼土を少量、スコリアを微量、粘質土の粒子を少量含む。黒色土の割合が高く、粘質土は遺構の周縁部に多く、ブロックは含まない。

第69図 穴状遺構実測図(4)

急角度で小林硬化鉆石に達し、南へと緩やかに傾斜しながら平坦面を形成していた。この落ち込みの上位には縄文後期の遺物包含層が堆積しており、敷設した硬化面の痕跡は認められなかった。なお、覆土中の出土遺物は、後期であることは特定できたものの、小片が多かったために、埋没時期は不明であった。なお、道路状遺構の落ち込みは、周辺から一段下がった細長い畝の区画と一致していた。この区画延長上の台地縁辺部は等高線が抉れており、その先の断崖中腹には湧水点が存在する。

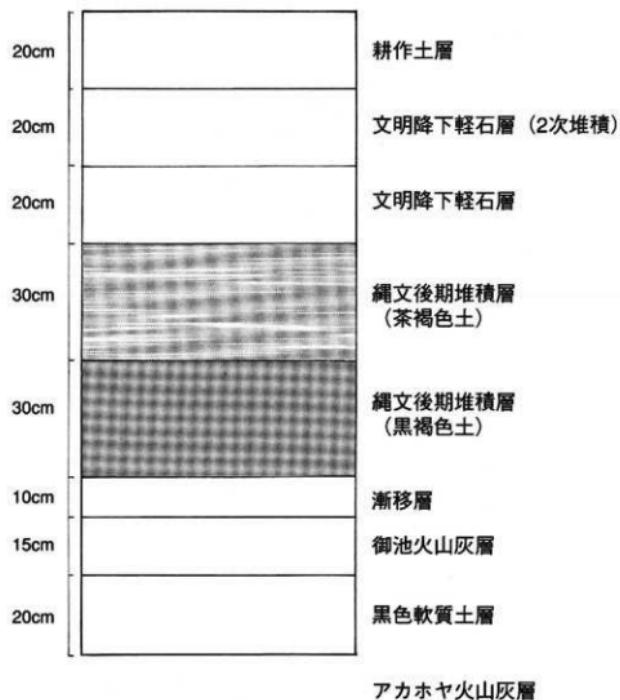


0 5 10cm

第70図 南東傾斜面土器廃棄場出土土器（1）



第71図 南東傾斜面土器廃棄場出土土器（2）



第72図 南東傾斜面土層柱状模式図

埋鉢

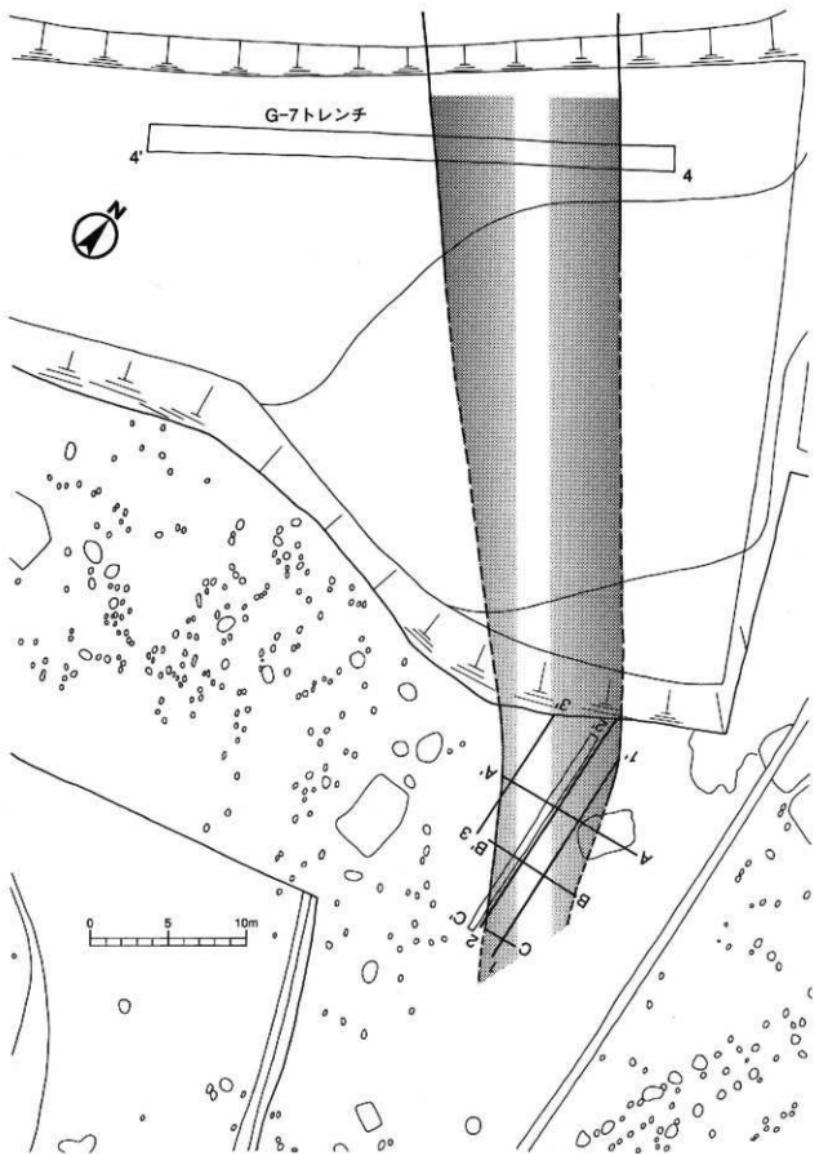
2基検出した。

(埋甕-01)

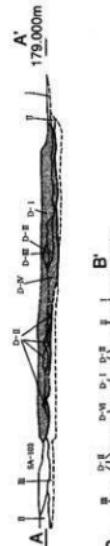
C区北東部の緩やかな斜面上で検出した。径90cmの歪な円形を呈し、一部柱穴状の落ち込みを含む土坑の上部に、指宿式の深鉢が東側に傾いた状態で出土した。土器は底部が欠損していた。

(埋甕-02)

C区南部の窪地遺構中央よりやや東側で検出した。土坑は径約70cmの円形であり、断面はロート状を呈する。土器は黒色磨研土器の深鉢であり、埋甕-01よりも深いところ



第73図 道路状造構-O1実測図（トーン部分は推定）



A'

178,000mm

0層 純作土層 1層 アカホヤ火山灰層 2層 矿物土層 3層 滅失水系ローム層

IV層 純作土の風化層、結構に固まつており、表面は下石子を含む。D-IVとV層との境界付近で、V層

V層 10mm程度D-IV層よりも薄く、表面には下石子を含む。D-VとVI層との境界付近で、VI層

VI層 2.5TR層 厚さ約10mmの風化層、層中に風化した小片を含む。D-VIとVII層との境界付近で、VII層

VII層 2.5TR層 厚さ約10mmの風化層、層中に風化した小片を含む。D-VIIとVIII層との境界付近で、VIII層

X層 2.5TR層 厚さ約10mmの風化層、層中に風化した小片を含む。D-XとXI層との境界付近で、XI層

XII層 2.5TR層 厚さ約10mmの風化層、層中に風化した小片を含む。D-XIIとXI層との境界付近で、XI層

XIII層 1.5TR層 厚さ約10mmの風化層、層中に風化した小片を含む。D-XIIIとXIV層との境界付近で、XIV層

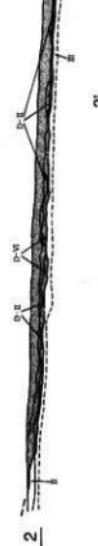
XV層 1.5TR層 厚さ約10mmの風化層、層中に風化した小片を含む。D-XVとXVI層との境界付近で、XVI層

XVII層 1.5TR層 厚さ約10mmの風化層、層中に風化した小片を含む。D-XVIIとXVIII層との境界付近で、XVIII層

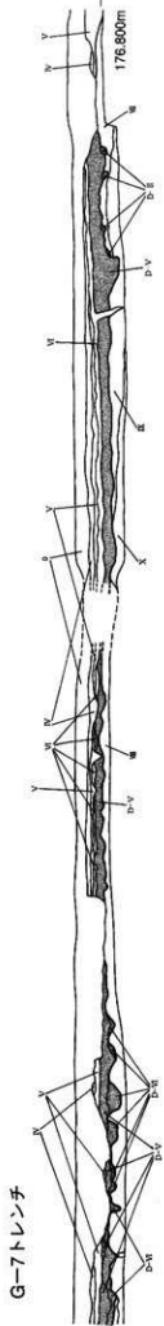
XIX層 1.5TR層 厚さ約10mmの風化層、層中に風化した小片を含む。D-XIXとXVIII層との境界付近で、XVIII層

XVIII層 1.5TR層 厚さ約10mmの風化層、層中に風化した小片を含む。D-XVIIIとXIX層との境界付近で、XIX層

XIX層 1.5TR層 厚さ約10mmの風化層、層中に風化した小片を含む。D-XIXとXVIII層との境界付近で、XVIII層



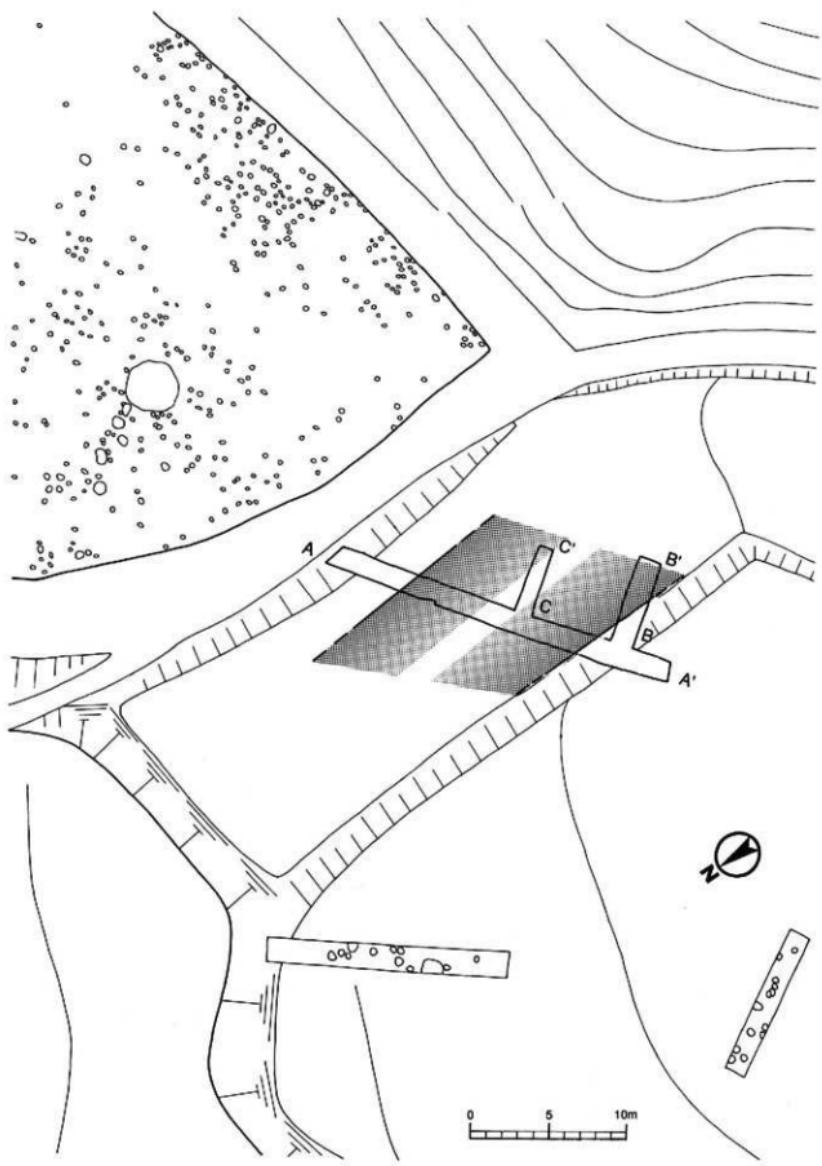
G-7トレーンチ



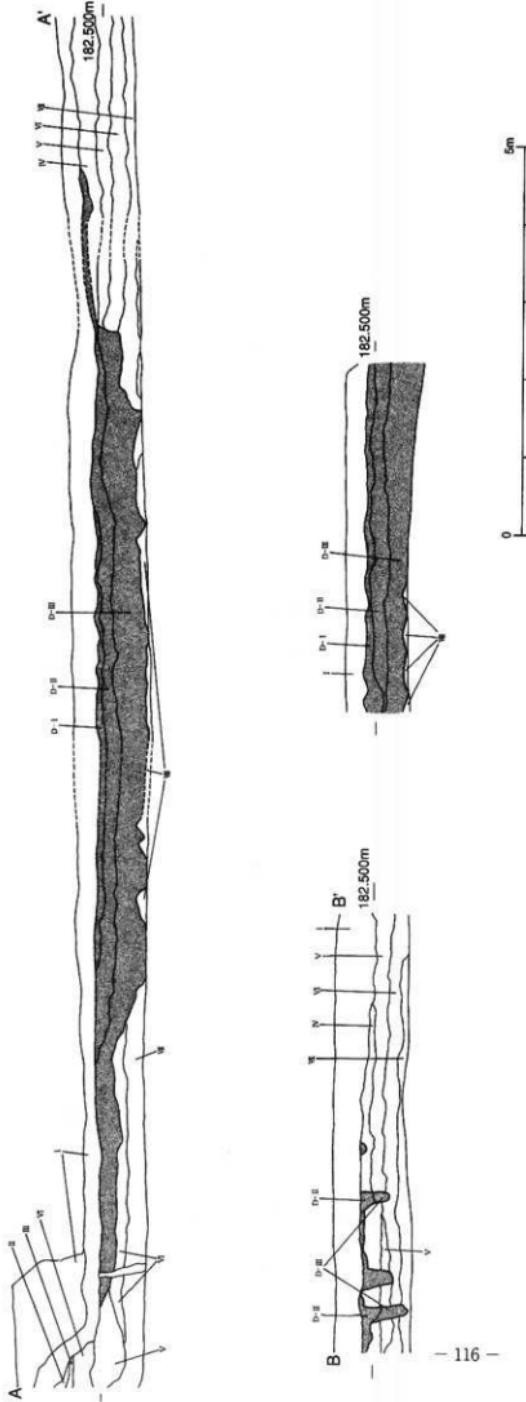
道路状態構造部分



第74図 道路状態構造-O1 土層断面図



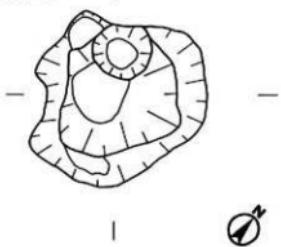
第75図 道路状造構-02実測図（トーン部分は推定）



D-1層 10IRにぶい黄褐色5/3 厚く縮まっている。進入物は特にないが、
層中から1cm大の土器の小片が少數出ている。
D-2層 10IR暗褐色3/3 厚く縮まっている。
D-3層 10IR暗褐色3/3 厚く縮まっている。
D-IV層 牛のスネローム層
D-V層 漢文早期ローム層
D-VI層 漢文中期ローム層下位の粘質土層
D-VII層 V層とVI層の中間層
D-VIII層 栲質土層
D-IX層 小林崎下砾石層
V層 上付近に地塊する層。
VI層 小林崎下砾石層。非常に厚く縮まっている。

第76図 道路状溝構-02 土層断面図

埋壟-01



UME-01

I層 10YR黒1,7/1

層は硬く締まっており、粘性あり。層中に、御池火山灰を中量、焼土の粒子を微量、炭の小片を微量含む。

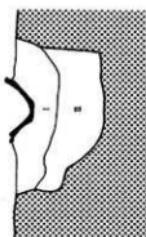
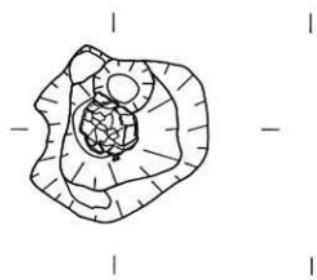
II層 10YR黒褐2/2

層は硬く締まっており、粘性あり。層中に、御池火山灰を少量含む。他には混入物はなかった。

UME-02

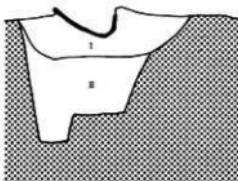
I層 10YR黒褐3/2

層は硬く締まっており、粘性に富む。白色粒子を少量含む。粘質土や焼土の粒子は含まれない。



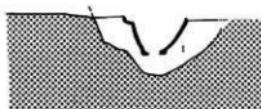
— 179.800m —

埋壟-02



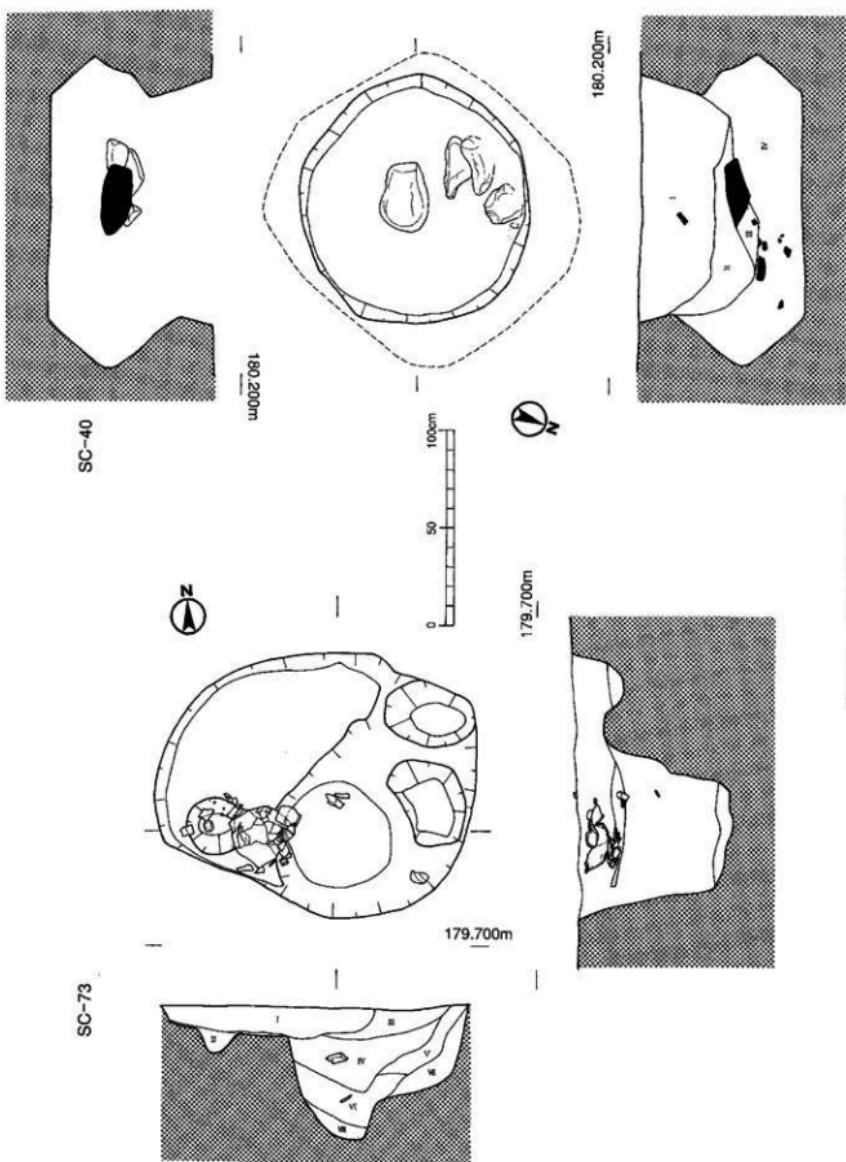
— 179.900m —

0 50 100cm

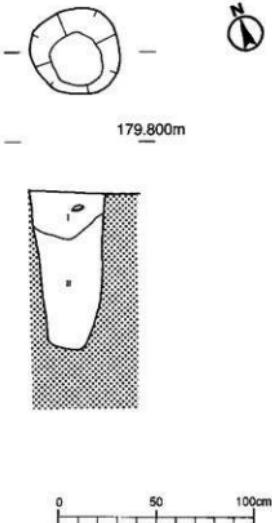


第77図 埋壟実測図

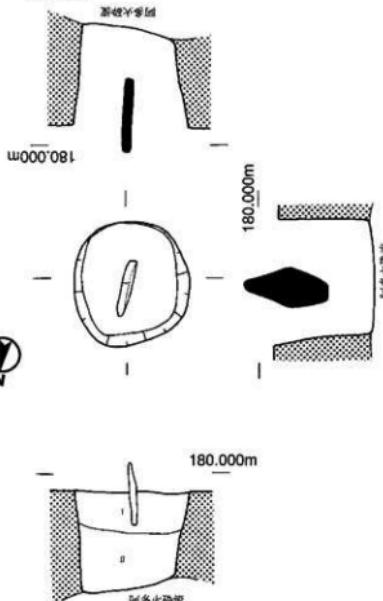
第78図 土坑実測図(1)



SC-88



SC-216



第79図 土坑実測図(2)

SC-40

I層 10YRにぶい黄褐色4/3
II層 10YR黒褐色3/2
III層 7.5YR褐色4/3
IV層 10YRにぶい黄褐色5/4

SC-73

I層 10YR黒褐色2/3
硬く締まっており、粘性に富む。層中に白色粒子を多量、赤色粒子を微量、粘質土の2mm以下の大粒子を多量、炭の小片を微量含む。このほか、顯著な混入物は堅果類の炭化物であり、混入量は「中量」であるが、これは他の土坑に比べ多い。

II層 10YR黒褐色2/3
硬く締まっており、粘性あり。層中に白色粒子を中量、赤色粒子を少量、粘質土の粒子を多量含む。このほか、堅果類の炭化物は微量である。

III層 10YR黒褐色2/1
やや硬く締まっており、粘性に富む。白色粒子を多量、赤色粒子を少量、粘質土のブロックを多量、粒子を多量含む。

IV層 10YR黒褐色2/1
軟質であり、粘性に富む。粘質土の5mm大のブロックを多量、火山ガラスを少量、白色粒子を微量、層下位を中心に早期ローム層の1cm大のブロックを含む。

V層 10YR暗褐色3/4
軟質であり、粘性に富む。層中に、粘質土のブロック、及び粒子をそれぞれ多量、火山ガラスを少量、スコリアを微量、白色粒子を少量含む。

SC-88

VI層 10YR黒褐色2/3
軟質である。粘質土は粒子単位で多量含まれており、ブロックの多いV層とは大きく異なる。他に赤色粒子を微量、白色粒子を少量、火山ガラスを少量含む。

VII層 10YR暗褐色3/5
軟質である。2mm単位の白色の粒子が部分的に集中しているが、これは青粉と考えられる。他に火山ガラスを少量、スコリアを中量、白色粒子を少量、3cm~2mm大の粘質土を多量、早期ローム層の5mm大のブロックを微量含むほか、焼泥も少く1点検出された。

SC-88

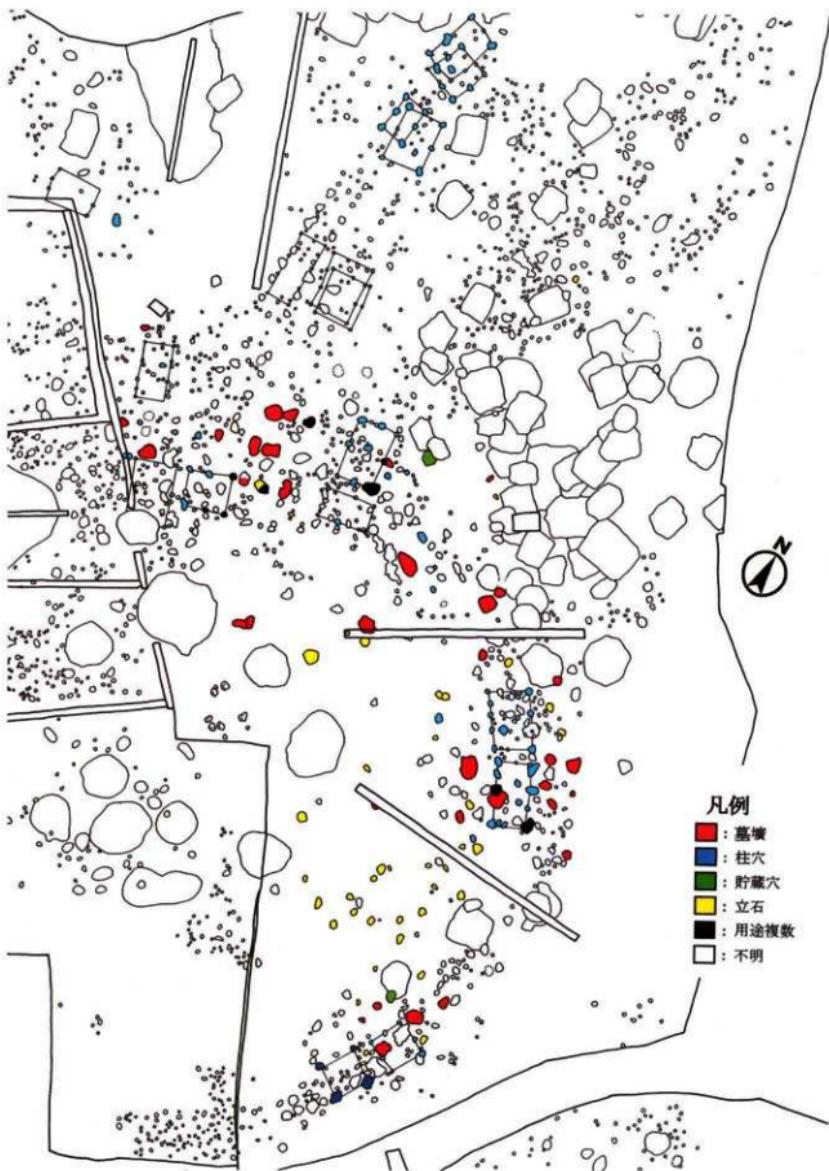
I層 10YR暗褐色3/3
層は硬く締まっている。層中に、炭の小片を中量、堅果類の炭化物を多量、土器の小片、難を少量、白色粒子を少量、スコリアを微量、火山ガラスを少量含む。粘性なし。

II層 10YR黒褐色3/2
層は軟質である。粘性なし。層中に、炭の小片を中量、粘質土の粒子を中量、白色粒子、赤色粒子をそれぞれ少量含む。

SC-216

I層 10YRにぶい黄褐色4/3
硬さ：9、粘性殆どなし。層中に、白色粒子を中量、炭の小片を少量、3mm大の粘質土の粒子を中量、焼土である赤色粒子を微量含む。

II層 10YR黒褐色3/3
硬さ：6、粘性少しあり。層中に、白色粒子を少量、スコリアを微量、炭の小片を微量、粘質土のブロックを微量含む。



第 80 図 土坑分類別分布図

表23 土坑觀察表 (1)

No.	最大高 (cm)	最大幅 (cm)	深さ (cm)	断面形	炭化物		鉄物		成土		腐物		分類
					位置	深度	位置	深度	位置	深度	位置	深度	
SC-01	92	22	19	直					中位	高	底面	1	
SC-02	96	22	19	直					底面	高	底面	1	
SC-03	156	112	19	直					底面	高	底面	1	
SC-04	58	56	32	直					底面	中	底面	1	
SC-05	84	76	20	直					底面	底	底面	1	
SC-06	154	163	47	圓底					底面	底	底面	1	
SC-07	120	110	39	直					底面	底	底面	1	
SC-08	55	55	21	直					中位	アコニット	下位	1	泥炭
SC-09	175	149	24	直					中位	アコニット	下位	1	泥炭
SC-10	233	142	69	直					中位	アコニット	下位	1	泥炭
SC-11	180	142	112	直					下位	底面	中位	1	泥炭
SC-12	122	99	30	底口一ト					下位	中位	中位	1	泥炭
SC-13	155	140+α	38	底口一ト					底面	底	底面	1	泥炭
SC-14	72	50	33	底口一ト					底面	底	底面	1	泥炭
SC-15	181	167	45	底口一ト					底面	中位	底面	1	泥炭
SC-16	84	59	20	底口一ト					底面	中位	底面	1	泥炭
SC-17	67	45	22	底口一ト					底面	中位	底面	1	泥炭
SC-18	57	39	29	底口一ト					底面	少量	底面	1	泥炭
SC-19	103	86	38	底口一ト					底面	少量	底面	1	泥炭
SC-20	80	51	44	直					底面	少量	底面	1	泥炭
SC-21	79	79	23	底口一ト					底面	少量	底面	1	泥炭
SC-22	26	74	—	直					上位	2	立石	1	
SC-23	86	—	50	底口一ト					上位	2	立石	1	
SC-24	122	—	46	底口一ト					上位	2	立石	1	
SC-25	—	—	—	(不規)					上位	2	立石	1	
SC-26	138	104+α	106	直					上位	2	立石	1	
SC-27	169	—	38	底口一ト					上位	2	立石	1	
SC-28	132	111	70	一輪筋状					上位	2	立石	1	
SC-29	217	129+α	122	直					上位	2	島壁と柱穴	1	
SC-30	—	60+α	—	直					上位	2	島壁と柱穴	1	
SC-31	224	173	—	直					上位	2	島壁と柱穴	1	
SC-32	165	82	39	底口一ト					上位	2	柱穴	1	
SC-33	76	59	91	直					上位	2	柱穴	1	
SC-34	61	80	47	直					上位	2	柱穴	1	
SC-35	58	—	55	底口一ト					上位	2	柱穴	1	
SC-36	76	52	46	直					上位	2	柱穴	1	
SC-37	55	55	78	直					上位	2	柱穴	1	
SC-38	108	101	103	直					上位	2	柱穴	1	
SC-39	79	72	62	直					上位	2	柱穴	1	
SC-40	121	116	82	長辺					上位	2	柱穴	1	
SC-41	165	130	80	所持狀					上位	2	柱穴	1	
SC-42	148	113	95	後突					上位	2	柱穴	1	
SC-43	120	102	74	直					上位	2	柱穴	1	
SC-44	93	82	113	直					上位	2	柱穴	1	
SC-45	36	71+α	67	ボウル					上位	2	柱穴	1	
SC-46	—	—	—	直					上位	2	柱穴	1	
SC-47	81	—	75	直					上位	2	柱穴	1	
SC-48	190	94	191	直					上位	2	柱穴	1	
SC-49	82	78	111	直					上位	2	柱穴	1	
SC-50	60	94	74	直					上位	2	柱穴	1	
SC-51	119	109	79	直					上位	2	柱穴	1	
SC-52	102+α	105	25	底口一ト					上位	2	柱穴	1	
SC-53	166+α	168	31	直					上位	2	柱穴	1	
SC-54	73	—	29	直					上位	2	柱穴	1	
SC-55	113	96	86	底口一ト					上位	2	柱穴	1	
SC-56	104	98	35	直					上位	2	柱穴	1	
SC-57	102	85	49	直					上位	2	柱穴	1	
SC-58	87	80	41	直					上位	2	柱穴	1	
SC-59	—	—	—	ガラス					上位	2	柱穴	1	
SC-60	36	46	36	底口一ト					上位	2	柱穴	1	
SC-61	124	123	30	直					上位	2	柱穴	1	
SC-62	124	92	90	直					上位	2	柱穴	1	
SC-63	125	107	35	直					上位	2	柱穴	1	
SC-64	111	109	39	直					上位	2	柱穴	1	
SC-65	—	—	—	一輪筋状					上位	2	柱穴	1	
SC-66	184	153	93	直					上位	2	柱穴	1	
SC-67	119	65	42	直					上位	2	柱穴	1	
SC-68	70	149	122	直					上位	2	柱穴	1	
SC-69	71	132	43	直					上位	2	柱穴	1	
SC-70	72	93+α	74	底口一ト	上位	アコニット	上位	下位	中位	中位	中位	中位	柱穴
SC-71	138	112+α	70	底口一ト	上位	アコニット	上位	下位	中位	中位	中位	中位	柱穴
SC-72	93+α	74	34	底口一ト	上位	アコニット	上位	下位	中位	中位	中位	中位	柱穴
SC-73	174	148	79	直	上位	アコニット	上位	下位	中位	中位	中位	中位	柱穴
SC-74	125	89	53	複数	上位	アコニット	上位	下位	中位	中位	中位	中位	柱穴
SC-75	79	100	62	直	上位	アコニット	上位	下位	中位	中位	中位	中位	柱穴
SC-76	87	79	84	直	上位	アコニット	上位	下位	中位	中位	中位	中位	柱穴
SC-77	78	61	44	複数	上位	アコニット	上位	下位	中位	中位	中位	中位	柱穴
SC-78	79	92+α	81	直	上位	アコニット	上位	下位	中位	中位	中位	中位	柱穴
SC-79	92+α	81	68	直	上位	アコニット	上位	下位	中位	中位	中位	中位	柱穴
SC-80	72	62+α	68	直	上位	アコニット	上位	下位	中位	中位	中位	中位	柱穴
SC-81	163	145	46	直	上位	アコニット	上位	下位	中位	中位	中位	中位	柱穴
SC-82	164	154	50	複数	上位	アコニット	上位	下位	中位	中位	中位	中位	柱穴
SC-83	74	69	39	直	上位	アコニット	上位	下位	中位	中位	中位	中位	柱穴
SC-84	95	89	60	底口一ト	上位	アコニット	上位	下位	多量	中位	中位	中位	植物多量
SC-85	62	—	48	直	上位	アコニット	上位	下位	多量	中位	中位	中位	柱穴
SC-86	56	—	69	複数	上位	アコニット	上位	下位	多量	中位	中位	中位	柱穴
SC-87	65	—	48	複数	上位	アコニット	上位	下位	多量	中位	中位	中位	柱穴
SC-88	49	46	82	直	上位	アコニット	上位	下位	多量	中位	中位	中位	柱穴
SC-89	50	41	41	複数	上位	アコニット	上位	下位	多量	中位	中位	中位	柱穴
SC-90	26	124	—	複数	上位	アコニット	上位	下位	多量	中位	中位	中位	柱穴
SC-91	118+α	110	直	多量(35)	中位	上位	少量	上位	中位	少量	上位	中位	馬糞と立石
SC-92	128	111+α	31	直	多量(35)	中位	上位	少量	上位	中位	少量	上位	立石
SC-93	141+α	136+α	83	複数	全位	中位(26)	中位・底面	少量	下位	中位	上位	2	馬糞と柱穴
SC-94	90+α	55+α	55	直	全位	中位	中位	中位	上位	中位	上位	2	立石
SC-95	121	86+α	66	底口一ト	多量(40)	全位	中位	上位	少量	上位	少量	1	馬糞
SC-96	26	91+α	87	底口一ト	全位	中位	中位	中位	上位	中位	少量	1	馬糞
SC-97	55	—	39	直	全位	中位	中位	中位	上位	中位	少量	1	立石
SC-98	77	38	31	ボウル	下位	中位(35)							

表24 土坑觀察表(2)

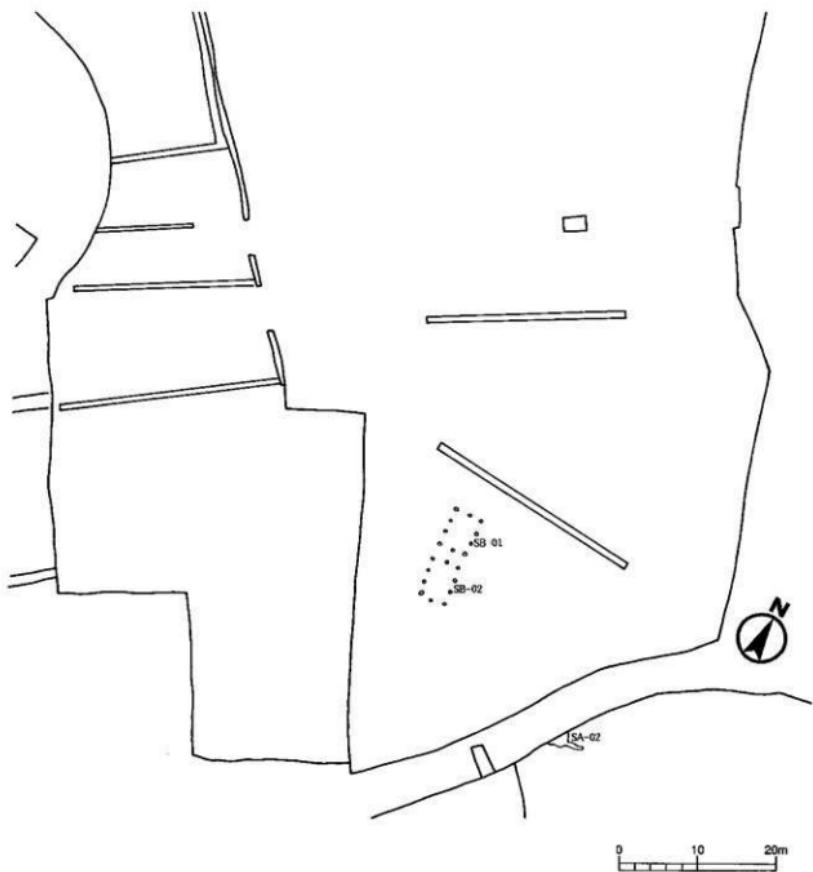
No.	最大幅	深さ	断面形	層別		土質	層	地物	分類
				上位	下位				
SC-99	55	49	53	ボクル					
SC-100	125	115	56	直線					
SC-101	79	-	63	直線					
SC-102	79	-	87	一部斜傾					
SC-103	158	143	29	直					
SC-104	137	105	90	直					
SC-105	125	62	54	直線					
SC-106	125	16	30	直					
SC-107	422	145	50	六方彌	上位	多量(30)			
SC-108	194	140	40	直線					
SC-109	115	82	41	直					
SC-110	102	75	75	直					
SC-111	58	-	34	直線					
SC-112	461 ^a	115	45	複数					
SC-113	180	105	51	直線	上位	少量			
SC-114	73	45	63	直					
SC-115	90	-	29	直					
SC-116	78	74	71	直					
SC-117	290	148	106	直					
SC-118	140	118	103	直					
SC-119	77	-	62	直	上位	少量			
SC-120	57	-	45	直					
SC-121	155	109	79	直					
SC-122	213	113	77	複数					
SC-123	71	-	72	直					
SC-124	74	-	55	直					
SC-125	70	-	51	一部直線					
SC-126	68	-	47	直					
SC-127	150	100	58	複数					
SC-128	60	60	20	不明					
SC-129	137	98 ^a	62	直					
SC-131	96	86	32	直	上位	少量			
SC-132	219	182	95	直					
SC-133	217	113	77	複数					
SC-134	65	-	53	直					
SC-135	79	-	55	直					
SC-136	89	-	44	直線					
SC-137	88	73	89	直	上位	少量			
SC-138	141	-	76	複数	下位	少量			
SC-139	60	45	45	不明					
SC-140	300	186	62	直					
SC-141	69	60	50	不明					
SC-142	55	45	35	不明					
SC-143	66	54	45	不明					
SC-144	90	90	60	不明					
SC-145	180	150	150	不明					
SC-146	300 ^a	199 ^a	16	一部直線					
SC-147	81	61	59	不明					
SC-148	161	-	88	直					
SC-149	107	181	85	一部複数					
SC-150	69	53	16	直					
SC-151	104	-	55	直線					
SC-152	105	85	65	直					
SC-153	129	43	25	不明					
SC-154	75	35	25	不明					
SC-155	84	65	55	不明					
SC-156	34	30	30	不明					
SC-157	58	72	57	直					
SC-158	65	55	55	直					
SC-159	129	43	25	不明					
SC-160	153	139 ^a	16	一部直線					
SC-161	300 ^a	199 ^a	56	一部直線					
SC-162	81	61	59	不明					
SC-163	161	-	88	直					
SC-164	107	181	85	一部複数					
SC-165	69	53	16	直					
SC-166	104	-	55	直線					
SC-167	105	85	65	直					
SC-168	117	106	50	直					
SC-169	91	86	12	三重					
SC-170	83	75	83	直					
SC-171	108	99	47	直					
SC-172	70	67	55	直					
SC-173	66	60	55	直					
SC-174	175	109	63	二段					
SC-175	169	79	65	一部直線					
SC-176	105	99	47	直					
SC-177	125	115	19	ボタル					
SC-178	125	89	26	複数					
SC-179	150	93	45	直					
SC-180	125	105	45	直					
SC-181	63	55	35	不明					
SC-182	120	84	26	不明					
SC-183	54	30	20	不明					
SC-184	99	66 ^a	16	直線					
SC-185	148	90	50	直					
SC-186	118	105	45	直					
SC-187	111	86	55	直					
SC-188	111	79	58	複数					
SC-189	60	55	55	直					
SC-190	92	85	64	直					
SC-191	110	99	45	ボタル					
SC-192	83	65	46	複数					
SC-193	132	125	48	直					
SC-194	106	97	45	直					
SC-195	105	65	39	ボタル					
SC-196	98	52	48	直					

表25 土坑觀察表(3)

No.	新大井	最大幅	深さ	断面形	骨質		土質		層		遺物	分類
					位置	地質	位置	地質	上位	下位		
S-297	70	49	50	直立								立石
S-298	66	60	50	不規								
S-299	165	191	18	直立			全体	少量	上位	1		立石
S-300	162	85	128	直立								柱穴
S-301	51	42	80	直立								柱穴
S-302	90	46	83	直立								柱穴
S-303	96	57	53	直立								柱穴
S-304	9	8	13	直立								柱穴
S-305	261-a	75	50	一箇ロート			中位	少量	上位	少量		
S-306	147	167-a	50	直立								
S-307	84	75	83	直立								
S-308	139	106	17	直立								直穴
S-309	90	85	17	直立								直穴
S-310	115	99	86	直立								直穴
S-311	66	56	82	直立								柱穴
S-312	66	56	87	直立								柱穴
S-313	62	-	41	直立								柱穴
S-314	102	82	34	直立								柱穴
S-315	97	84	76	直立								柱穴
S-316	68	63	52	直立								立石
S-317	79	78-a	15	直立			全体	微量	上位	1		後期土器床から
S-318	116	106	39	直立								立石
S-319	118	107	39	直立								立石
S-320	53	56	42?	直立								立石
S-321	92	76	39	直立								立石
S-322	106	65	69	直立			下位	少量(1)				
S-323	47	44	31?	直立								
S-324	42	36	20?	直立								
S-325	95	85	30	直立								
S-326	65	52	17	直立								
S-327	65	56	50?	直立								
S-328	162	95+a	49	直立								直穴
S-329	137	96	30?	直立			全体	微量	上位	1		直穴
S-330	48	37	37	直立								立石
S-331	87	56+a	40	直立								立石
S-332	71	57	28	直立								柱穴
S-333	54	54	直立									立石
S-334	96	85	23	一箇ロート								立石
S-335	60	-	18	不規								立石
S-336	73	58	30	直立								立石
S-337	83	71+a	16	直立								立石
S-338	75	68	17	直立								立石
S-339	57	60+a	12	直立								立石
S-340	89	76	13	直立								立石
S-341	45	36	15	ボタル								立石
S-342	76	57	9	ボタル								立石
S-343	53	34+a	12	ボタル								立石
S-344	96	68	48	直立								立石
S-345	82	68	28	直立								柱穴
S-346	110	92	119	直立								立石と柱穴
S-347	94	90	10	直立								立石
S-348	91	81	24	直立								柱穴
S-349	66	53	直立									立石
S-350	178	-	26	直立			上位	中量(13)				直穴
S-351	167	115	70	直立								柱穴
S-352	279	224	83	ボタル			上位	少量(1)				
S-353	76	-	48	一箇ロート			武田	少量				
S-354	117	72	33	直立								柱穴
S-355	113	103	33	直立								柱穴
S-356	79	79	26	直立								柱穴
S-357	77	65	50	直立								柱穴
S-358	82	74	76	直立								柱穴
S-359	78	38+a	92	一箇ロート								柱穴
S-360	167	36+a	160	直立								柱穴
S-361	88	81	48	一箇ロート								柱穴
S-362	84	73	29	直立								柱穴
S-363	55	56	36	直立								立石
S-364	119	97	20	二箇ロート								立石
S-365	141	126	35	直立								直穴と直立
S-366	119	83	14	直立								立石
S-367	61	49	15	直立								立石
S-368	123	110	25	直立								立石
S-369	20	60	子カル									柱穴
S-370	54	54	子カル									柱穴
S-371	185	-	80	直立								直穴
S-372	50	36	不規									直穴
S-373	不規	不規	不規									直穴
S-374	不規	不規	不規									直穴
S-375	87	83	33	直立								直穴
S-376	160	63+a	112	一箇ロート								柱穴
S-377	83	81	直立									柱穴
S-378	39	39	不規									柱穴
S-379	48+a	87	一箇ロート				上位	アコサ				柱穴
S-380	98	77	35	直立								柱穴
S-381	69	30+a	41	直立								柱穴
S-382	142	54+a	85	直立								柱穴
S-383	84	84	54	不規								柱穴
S-384	65	65	ボタル									柱穴
S-385	81	54	不規									柱穴
S-386	105	66	不規									柱穴
S-387	96	66	不規									柱穴
S-388	123	90	不規									柱穴
S-389	201	90	60	不規								柱穴
S-390	75	75	不規									柱穴
S-391	60	57	不規									柱穴
S-392	60	30	不規									柱穴

表26 土坑觀察表(4)

No.	最大 粒度 (cm)	最小 粒度 (cm)	断面形 (cm)	层状物		砂粉		泥土		粘土		造物	分類
				位置	角度	位置	角度	位置	角度	位置	角度		
S-295	93	43	不明										
S-296	93	36	不明										
S-297	36	30	不明										
S-298	65	57	不明										
S-299	90	73	不明										
S-300	65	56	不明										
S-301	65	53	不明										
S-302	123	66	不明										
S-303	69	54	不明										
S-304	90	57	不明										
S-305	96	66	不明										
S-306	81	63	不明										
S-307	89	69	不明										
S-308	90	68	不明										
S-309	90	60	不明										
S-310	93	63	不明										
S-311	105	84	不明										
S-312	123	99	不明										
S-313	356	150	不明										
S-314	17	12	不明										
S-315	23	69	不明										
S-316	114	63	不明										
S-317	183	150	不明										
S-318	66	36	不明										
S-319	64	30	不明										
S-320	195	90	不明										
S-321	126	66	不明										
S-322	66	54	不明										
S-323	66	54	不明										
S-324	36	30	不明										
S-325	75	24+ α	直									東方多量早削	柱穴
S-326	123	83	149	底ロート									
S-327	63	36	不明										
S-328	66	36	不明										
S-329	67	34	ホウル										
S-330	66	36	不明										
S-331	127	103	32	複数									
S-332	93	33	不明										
S-333	96	33	不明										
S-334	93	60	不明										
S-335	27	27	不明										
S-336	125	63	不明										
S-337	113	54	不明										
S-338	66	54	不明										
S-339	66	60	不明										
S-340	84	62	不明										
S-341	80	39+ α	薄									上位 2	柱穴
S-342	59	48	36	不明								中位 1	立石
S-343	66	36	不明										
S-344	114	62	不明										
S-345	123	103	水明	強款									
S-346	167	89	薄	中量(17)								上位 2	柱穴
S-347	123	63+ α	48	薄			下位 少量					上位 5	基盤
S-348	63	36	不明										
S-349	72+ α	66+ α	25										
S-350	66	45	不明										
S-351	103	72	不明										
S-352	102	66	不明										
S-353	82	47+ α	33	不明									
S-354	54	33	不明										
S-355	66	36	不明										
S-356	63	34	不明										
S-357	92	51+ α	薄									上位 小ぶり多量	
S-358	62	45	不明	少量(0.5)									
S-359	66	45	不明										
S-360	66	34	不明										
S-361	60	36	不明										
S-362	120	45	不明										
S-363	188	105	不明										
S-364	65	129	不明										
S-365	66	54	不明										
S-366	63	36	不明										
S-367	63	36	不明										
S-368	66	66	不明										
S-369	96	75	不明										
S-370	90	36	不明										
S-371	66	36	不明										
S-372	66	36	不明										
S-373	120	75	不明										
S-374	66	36	不明										
S-375	66	62	薄									上位 5	柱穴
S-376	107	79	29	底ロート								上位 2	圓筒式
S-377	161	126	5										



第81図 古代遺構分布図

から埋められ、検出面に対し垂直に据え置かれていた。底部はやはり欠損していた。遺構の検出位置からは、黒色磨研土器の浅鉢が良好な残存状態で出土していたことから、深鉢の「蓋」が存在した可能性が考えられると共に、本来の検出面は更に上位と考えられる。

土坑

調査区内からは、環状土坑群以外から多くの土坑を検出した。多くは北東部の傾斜面上に分布していたが、平面形態は環状土坑群以上に不定形である場合が多く、用途の推定は困難であった。なお、遺物に乏しいため、構築時期の推定は困難である。

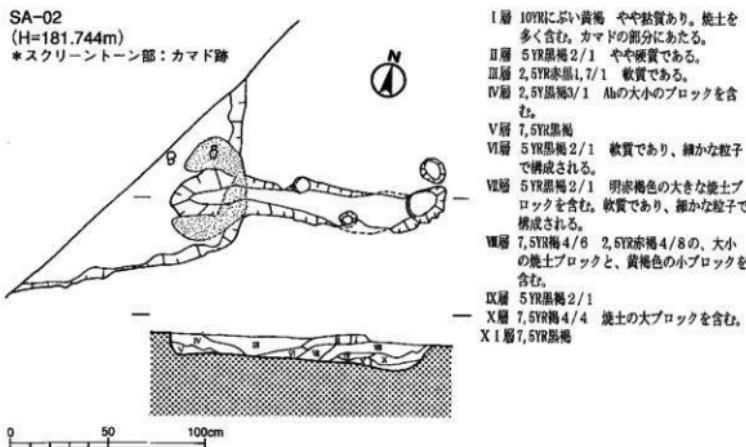
ピット群

調査区の全面から検出されたが、中でも環状土坑群、列状掘立柱建物群付近、D区南側、B・E・F区に多く分布していた。このうち環状土坑群周辺は平面形態・断面形とも多くのバリエーションが存在するが、列状掘立柱建物群周辺は径10~15cmの円形を呈し、深さ10cm~40cm以上のものが主体であった。D区南側、E・F区は検出作業のみであったが、平面形態や大きさが似通っていることから、深さも同様と推察される。これらのピットは、通常であれば平地式住居が想起されるが、径が不足しているため、現時点では、平面形が確認できないものは用途不明としたい。

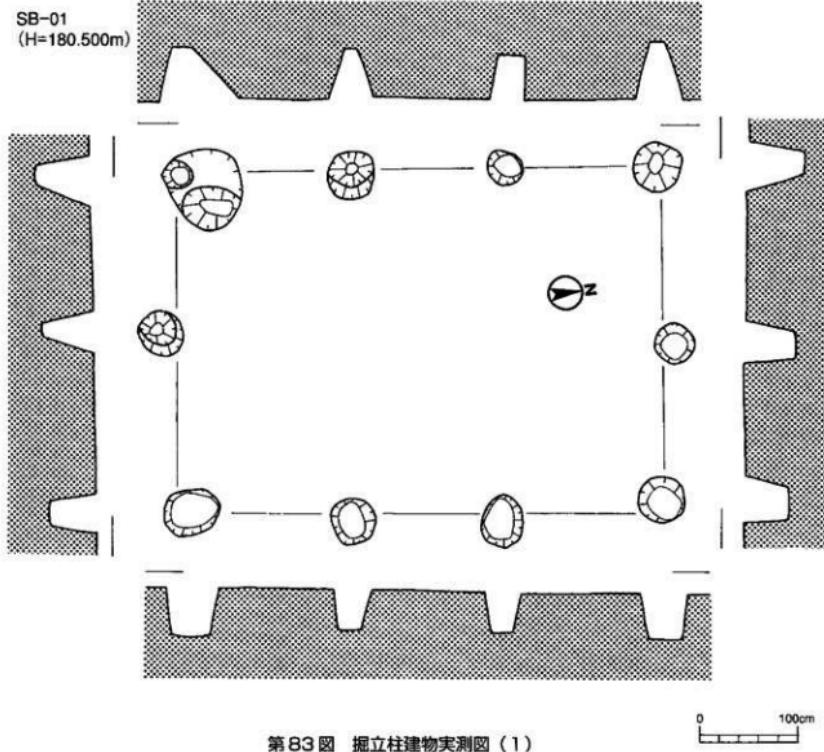
出土遺物

調査区内から出土した石器は、打製石斧が調査区全体で5点未満であるのに対し、磨製石斧は60点前後に上る。また、石鏸は現在までのところ50点未満に留まる一方で、切目石錐は50点前後、磨石は100点以上に及ぶ。石皿は膨大な数が出土したが、包含層や堅穴住居内だけでなく、立石や柱穴の支え石として検出されることも多かった。

出土土器は膨大な量に上る。その多くは通常の深鉢形土器であるが、移入系とされる磨消繩文系土器はごく少量であり、宮崎県央部の在地系とされる貝殻文系土器が大部分を占めた。



第82図 堅穴住居実測図(36)



第83図 掘立柱建物実測図(1)

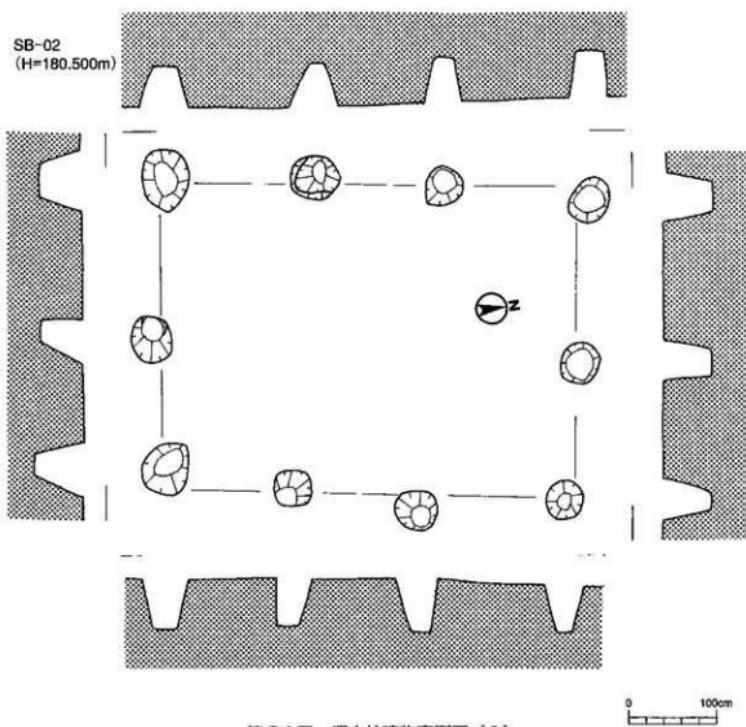
特殊遺物の類では、石器類は頁岩製の大珠や穴を有する自然蝶、研磨を行った瑪瑙製の蝶などが出土した。石棒は10点前後確認されたが、いずれも細く小型であった。ノジユールは30点前後であり、竪穴住居から出土することが多かった。土器類は、台付皿形土器が一定量出土しているほか、注口土器は2点、他に鹿頭形土製品が1点出土している。

e. 古代

竪穴住居、掘立柱建物を検出した。

竪穴住居

1軒検出した。(S A - 02) はB区北側の境界部で検出した。角が確認されたため、平面形態は方形と考えられるが、残りの部分は不明であるため、大きさは定かでない。遺構内に土坑や柱穴は確認できなかったが、遺構の隅から太さ20cm前後の煙道が1m近く伸びていた。覆土からは土師器や縄文後期の土器が出土した。



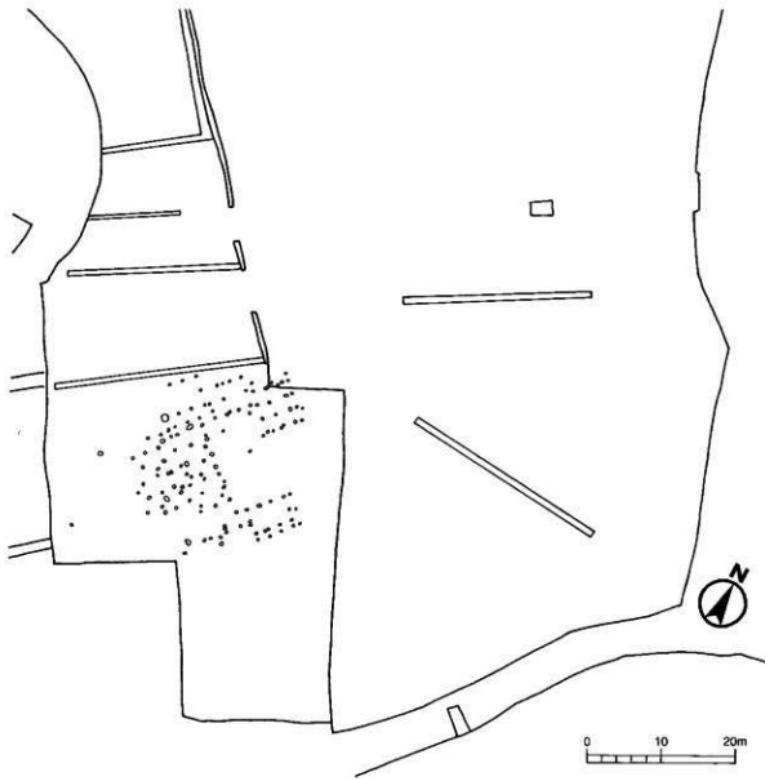
第84図 掘立柱建物実測図（2）

掘立柱建物

C区南部より、2棟磁北方向に並んだ状態で検出した。遺構は北から（SB-01, SB-02）とした。どちらも2×3間である。柱穴の太さは20~30cmと細い。覆土からは、土師器に混じって縄文後期の土器も多く出土した。

出土遺物

（SB-01,02）の北側隣接地から、集中的に出土した。なお、他にもC区の南東部や北西部からも僅かながら認められる。遺物は、布痕上器や碗などの土師器のほか、須恵器、内黒上器が出土した。なお、縄釉陶器も採集されている。



第85図 中世遺構分布図

f. 中世

掘立柱建物

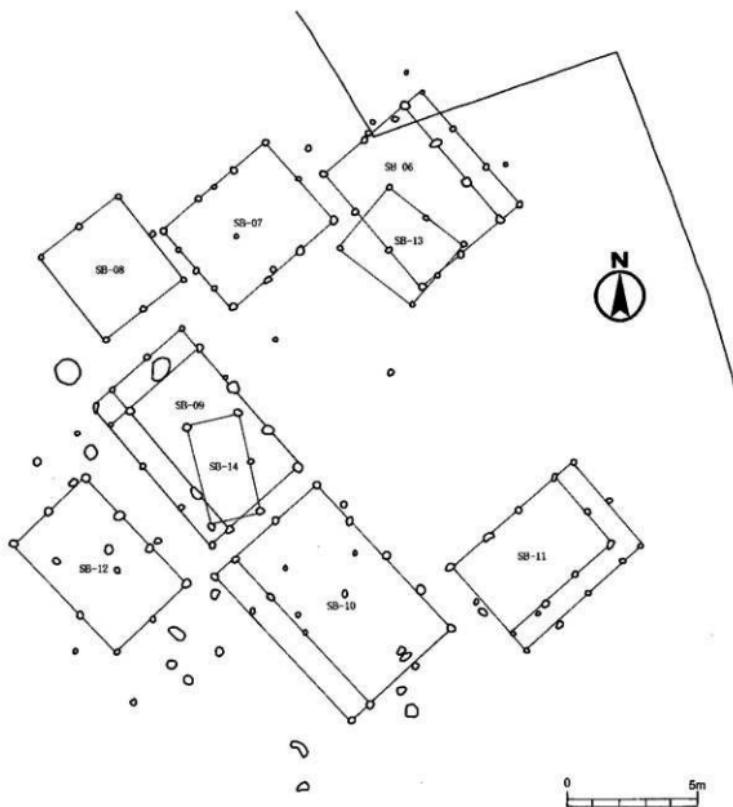
D区東部より、径15～20cmの細い柱穴が集中して検出された。その配置から、第85図に示すように9棟の存在を確認した。建物は（SB-06）と（SB-13, SB-09）と（SB-14）以外は重複していないことから、建物の時期はかなり限られていたと考えられる。柱穴の覆土中から、洪武通宝が1枚出土したことから、これらの遺構は中世と考えられる。

出土遺物

生活面が既に削平されていたためか、表面採集も含め、遺物は確認されなかった。

g. 遺跡範囲確認調査

調査区西側に、県文化課により試掘調査が行なわれた。その結果、多くの遺構の存在が明らかとなった。包含層及び遺構からは曾畠式が僅かに出土し、C区との時期差が考えられるほか、後期後葉の丸尾式から晩期初頭に至るまでの土器が多く出土した。特筆すべき遺物としては、T 2, T 8から出土した玉が挙げられる。なお、T 8~10、T 19, 20では、アカホヤ火山灰層及び牛のスネローム層が消失していた。早期ローム層の上位は直接耕作土が堆積していることから、土層の消失は開墾や耕作に伴うとも判断できるが、縄文後期の遺構は、その消失部分の内側からも高密に確認されている。



第86図 中世掘立柱建物群分布図

第Ⅲ章 中間まとめ

ここでは、調査や資料整理作業によって得られた成果に考察を行いたい。なお、古代及び中世は省略した。今回はあくまで作業中である現時点の報告であり、正式な結論は改めて執筆する予定である。

a. 旧石器時代

ナイフ形石器文化期は、剥片尖頭器、角錐状石器、ナイフ形石器が出土している。これらは全てA T上位の石器群に属する。周辺では、元野河内遺跡（文獻1）から三稜尖頭器、ナイフ形石器、剥片尖頭器、角錐状石器が、黒草第2遺跡（文獻2）からは剥片尖頭器が、高野原遺跡（文獻3）からはナイフ形石器、剥片尖頭器がそれぞれ出土している。しかし、いずれも石器群の様相を把握できる出土状況ではない。本遺跡も、包含層の調査が行われなかったため、遺物の存在以上の様相は不明であった。

なお、出土遺物中にある台形（様）石器は、近年A T下位からも出土例が増加しており（文獻4）、両者の形態差が小さいことから、本来の出土層位が不明である本資料の時期は、現時点では不明と言わざるを得ない。

細石器文化期は、野岳型に属する黒曜石製の細石核が2点出土した。類似資料は、元野河内遺跡、黒草第2遺跡でも確認されている。なお、船野型の細石核は、周辺では高野原遺跡から1点採集されたのみである。

b. 縄文早期

集石遺構は15基検出された。窪地遺構内で検出された集石遺構の検出面は、縄文後期の環状を呈する土坑群と同じである。これは、集石遺構が自然堆積により一旦埋没した後、縄文後期の整地によって、地表面に再び姿を表したためである。その際、（S I - 09,11,14）は遺構上部が破壊されたと考えられる。なお、縄文後期に行なわれた窪地遺構の中央部は阿多火碎流の漸移層にまで達していることから、この一帯に存在した集石遺構は消失したと推測される。

集石遺構の分布は、A・B区（S I - 04～07）、C区南部（S I - 01）、C区中部（S I - 08～15）の3箇所に分けられる。A・B区の集石遺構は底石を伴うものが認められたが、C区中部では一部に花弁状配石が行なわれるなど、構造の違いが認められた。遺構周辺の出土遺物は、A・B区が早期中葉から後葉であるのに対し、C区中部では早期初頭である。時間的変遷はC区中部→A・B区となるが、この間には空白期が存在する。なお、高野原遺跡から出土したいわゆる別府原タイプはこの空白期にあたるほか、A・B区と同時期の遺物は元野河内遺跡でも多く確認されたことから、集落の移動は、元野地区全体で行なわれたようである。

c. 繩文前期～中期前葉

繩文時代前期は、概要報告書において、「覆土中から羽島下層式が、床面直上から轟B式が出土した竪穴住居が1軒検出されている」と記述した。これはSA-66のことであったが、轟B式とした遺物は、観察により繩文前期末～中期初頭の轟式類似土器であることが判明し、遺構覆土から繩文後期の土器も多く出土していたことが確認されたため、竪穴住居は後期と認識を改めた。現在のところ、この時期にあたる竪穴住居は確認されていない。

周辺では、本野原遺跡北側の木野遺跡（文献5）、及び段丘上に位置する高野原遺跡（B・C区）、更に元野河内遺跡でも確認されており、集落は川を挟んだ両岸に営まれていたと考えられる。

d. 繩文中期後葉～晩期

最も多くの遺構が残された時期である。はじめに各遺構について、次に出土遺物について説明を行い、本野原遺跡の時間的変遷について考察を行いたい。

竪穴住居

検出された竪穴住居は、（SA-03）や（SA-11）を除いて柱穴の配置に規則性が乏しいものが多く、1本も検出されないものもあった。また、中央土坑は、全体の半分以下であり、石組みや埋甕は行なわれず、浅く、覆土中の炭化物や焼土は微～少量と、火の機能を積極的に肯定できる要素に乏しいものが多かった。床面に、貼床・硬化面が認められた遺構はごく少数である。特に、アカホヤ火山灰屑を床面とする遺構は東側住居群を中心として多く検出されているにも関わらず、硬化面が認められなかったのは特徴的であり、住居の使用期間は短かったと考えられる（註1）。なお、南九州の繩文後期における定型的な住居構造として知られる（文献6）、中央土坑の両脇にピットを伴う遺構は12軒確認された。

覆土からは多くの遺物が出土したが、大部分は覆土上層であり、床面付近の出土は稀であった。また、覆土上層の出土遺物も大半は小片であり、接合を経ても器形の復元が可能な個体はごく僅かであった。その中で、（SA-08, 72, 86）の覆土上層出土土器は、残存状態が良好であり、一括廃棄が行なわれたと考えられる。

列状掘立柱建物群

（SB-03～05）は、大型の柱穴によって構成されていた。覆土からは焼土や骨粉も確認されたが、主体は早期ロームや粘質上のブロックであり、掘り込みにより生じた土をそのまま埋めたと考えられる。土層断面には、（SB-04）の（P-1, 2）をはじめとして掘り返された痕跡が認められる事から、建て替えが繰り返し行なわれたと考えられる。なお、今回想定した掘立柱建物はあくまで仮想である。たとえば（SB-03）の4×2のまとまりは、2×2が2棟並んでいたとも考えられるし、（SB-05）の不自然な配列も、はじめ東の2列で建った後、西の2列を使用して建て替えたと考えることもできる。（SB-04）における、繩文時代の掘立柱建物として類例のない3×3の並びも、そうした時期差が存在したこととも考えられる。なお、小規模の堀立柱建物は、大型のものよりも配置には

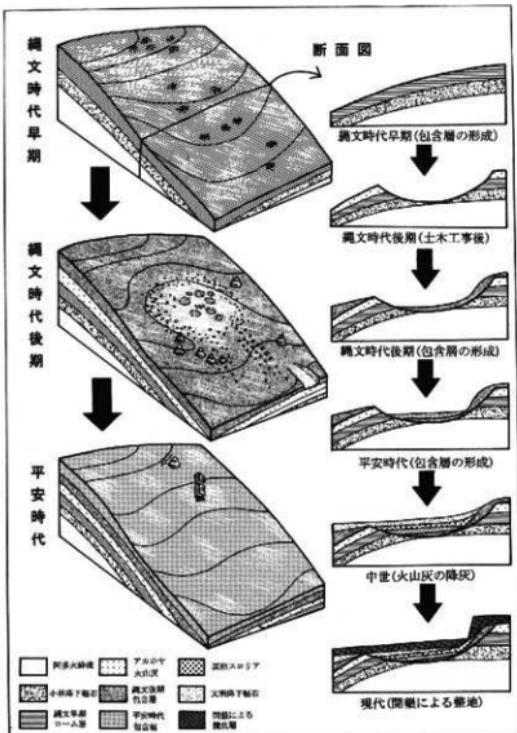
らつきがあった。また、重複が認められることから、いくつかの時期に跨って存在したと考えられる。

遺構の分布する一帯は、開墾により早期ローム層中位まで削られており、実際の掘り込み面は、調査で確認された検出面よりも30~50cm上位であったと予測される。そのため、(SB-03~05)は100cm~170cmと、非常に深かったことになる。また、掘立柱建物が豊穴を伴っていた可能性も考えられる。

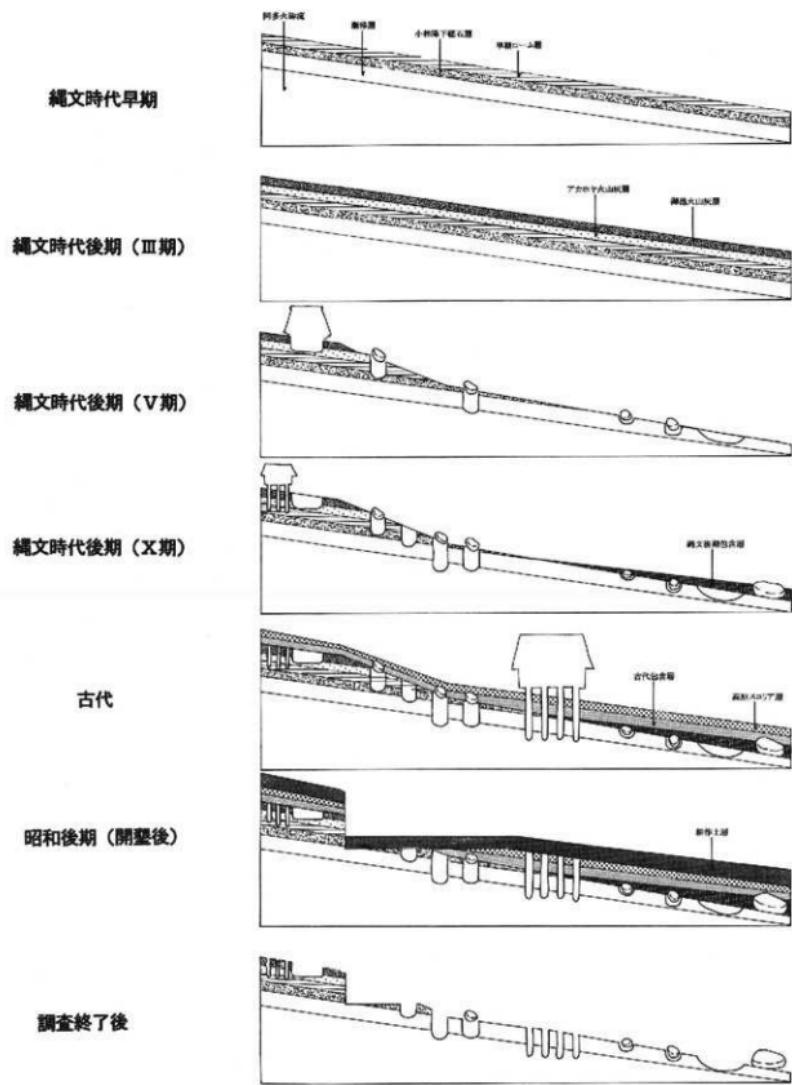
土木工事(註2)

C区南部で確認された大規模な土層の消失は、土層断面の照合作業を進めた結果、概要報告書等で示した卵形より正円形に近い反面、南西部が抉れることが確認された。一方、窪地遺構の南部はF区西部で確認された道路状遺構に接する可能性も考えられる。

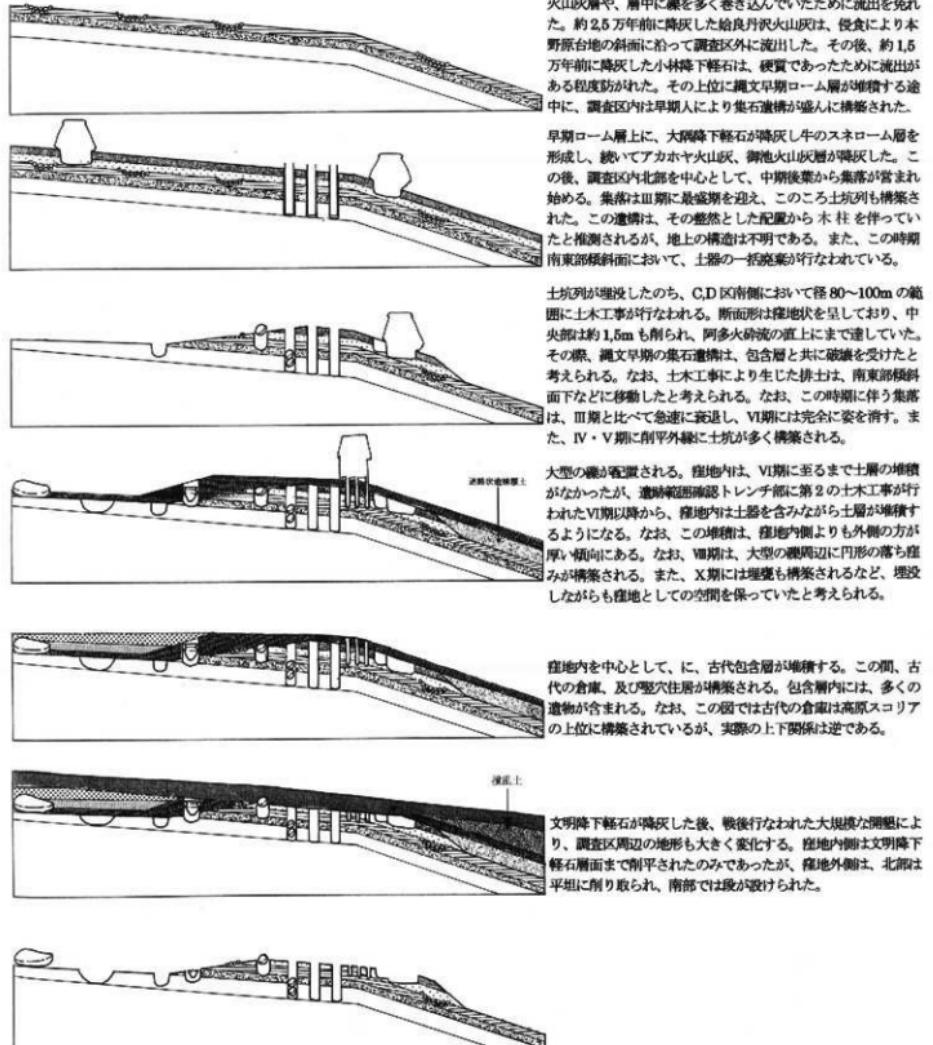
注目されるのは、窪地遺構内に分布する遺構と、検出面からの出土遺物の時間的関係である。底面から出土する遺物は、後期後葉以降の丸尾A・Bタイプ及び納屋向タイプが主体であるが、窪地遺構の外縁を環状に巡る土坑群のうち、既に調査が行なわれたC区からは、後期中葉の市来I・II式が多く出土する傾向にある。この時間的隔たりから、市来I式以前に整地が行なわれ、市来I・II式期に環状土坑群が構築されながら、窪地遺構中央部は丸尾A式期に至るまで包含層が堆積されずに維持された、という推測が成立立つ。なお、遺跡内における土層堆積の変遷は、第88・89図に模式図で表した(註3)。



第87図 窪地遺構内土層堆積模式図



第88図 痿地遺構南側土層堆積模式図（1）



第89図 塚地遺構北側土層堆積模式図（2）

約10万年前に、阿多火砕流が噴火した。火砕流は、元野地区一帯に分厚く堆積し、本野原台地では、斜面を形成した。この火山灰層や、層中に巻き込んでいたために流出を免れた。約2.5万年前に噴火した給良丹沢火山灰は、侵食により本野原台地の斜面に沿って調査区外に流出した。その後、約1.5万年前に噴火した小林降下軽石は、硬質であったために流出がある程度防がれた。その上位に調査早期ローム層が堆積する途中に、調査区内は早期人により集石遺構が盛んに構築された。

早期ローム層上に、大林降下軽石が降灰し牛のスネローム層を形成し、続いてアカホヤ火山灰、御池火山灰層が噴火した。この後、調査区内北部を中心として、中期後葉から集落が営まれ始める。集落はⅢ期に最盛期を迎える。このころ土坑列も構築された。この遺構は、その整然とした配置から木柱を伴っていたと推測されるが、地上の構造は不明である。また、この時期南東部傾斜面において、土器の一括発掘が行なわれている。

土坑列が埋没したのち、C,D区南側において幅80~100mの範囲に土工事事が行なわれる。斯面形は窪地状を呈しており、中央部は約1.5mも削られ、阿多火砕流の面上にまで達していた。その際、調査早期の集石遺構は、包含層と共に破壊を受けたと考えられる。なお、土工事により生じた排水は、南東部傾斜面下などに移動したと考えられる。なお、この時期に作る集落は、Ⅲ期と比べて急速に衰退し、Ⅵ期には完全に姿を消す。また、Ⅳ・Ⅴ期に削平外線に土坑が多く構築される。

大型の礫が配置される。塚地内は、VI期に至るまで土層の堆積がなかったが、遺跡範囲南端トレンチ部に第2の土工事が行われたVI期以降から、塚地内は土器を含みながら土層が堆積するようになる。なお、この堆積は、塚地内側よりも外側の方が厚い傾向にある。なお、VII期は、大型の縄周辺に円形の落ち塹みが構築される。また、X期には埋甕も構築されるなど、埋設しながらも塚地としての空間を保っていたと考えられる。

塚地内を中心として、に、古代包含層が堆積する。この間、古代の倉庫、及び竪穴住居が構築される。包含層内には、多くの遺物が含まれる。なお、この段では古代の倉庫は高原スコリアの上位に構築されているが、実際の上下関係は逆である。

文明降下軽石が噴火した後、後行なわれた大規模な開墾により、調査区周辺の地形も大きく変化する。塚地内側は文明降下軽石層面まで削平されたのみであったが、塚地外側は、北側は平坦に削り取られ、南部では段が設けられた。

さて、問題は整地の際に生じた、3,000m³以上と見積もられる堆土の行方である。調査では、窪地遺構の南東にある傾斜面では、土器の一括廃棄が行なわれた層の上位に、早期ローム層や粘質土層など、本来下層に堆積するブロックの混入が認められたほか、東側堅穴住居群の上位にも、開墾による削平を受けてなお50cmも残存する、縄文後期の遺物を大量に含む層が確認された。また、C区北部の縄文後期包含層からは、整地と共に浮き上がり混入したと考えられる縄文早期の加賀山式・小牧3A段階が一定量出土していることから、堆土は窪地遺構周辺の標高の低い地点に移動した可能性が考えられる。しかし、いずれも断片的な情報でしかなく、盛土遺構の全体形や堆積状況を把握するには至らなかつた。

なお、調査区西側の遺跡範囲確認トレントにおける、アカホヤ火山灰層と牛のスネローム層の消失も、土木工事の可能性が考えられる。消失部内は、縄文早期ローム層の上位に耕作土が直接堆積していたため、削平時期の想定は、アカホヤ火山灰層灰から現代までが対象となる。しかし、窪地遺構の大きさは直径約100mと、C・D区南部の削平範囲とはほぼ同じであること、そして縄文後・晚期の土坑や堅穴住居は、消失部及びその周辺に集中していることから、削平は縄文後・晚期であった可能性が高い。ただし、縄文後期の整地であったとしても、削り取られた部分の深さは最大で約70cmと推測され、C・D区の整地よりも小規模である。出土遺物は後期末の納屋向タイプや晚期初頭の深鉢が多く、C・D区との時期差は、集落中心部の移動が原因していると考えられよう。

窪地遺構は、栃木県寺野東遺跡の調査を契機として、関東地方で類例が増加中であり、環状盛土遺構と併せて、土木工事の象徴的形態と考えられている（文献7）。九州という遠隔地において、土木工事が検出されたことは極めて珍しく、驚くべき事例と言える。なお、九州で土木工事が把握できた遺跡としては、横峯遺跡（鹿児島県屋久町）を挙げることができる（文献8）。全体形がL字状と予想されていることや、窪地遺構内に堅穴住居が集中している点は異なるが、遺跡の時期は後期中葉から後葉を主体としており、本野原遺跡の整地時期に重なるほか、礫の入った土坑の検出など、共通点も認められる（文献9）。また、本野原遺跡の北方、七野台地の最北部に立地する丸野第2遺跡のA地区でも（文献10）、弧状に分布する堅穴住居に沿って等高線が不自然に湾曲しており、内側では本野原遺跡と同様にアカホヤ火山灰層の消失が認められたことから、窪地遺構である可能性が考えられる（註4）。遺跡の主体は岩崎式から丸尾式と、本野原遺跡の窪地遺構構築時期に一部重複することから、横峯遺跡同様、関連遺跡として注目されよう。

中央配石

全て砂岩である。礫は、遺跡北部を流れる元野川と、遺跡東部を流れる別府田野川のどちらでも採集可能である。しかし、大型の礫も多く、運搬は容易ではなかったと推測される。

礫は、下面が窪地遺構の検出面と同じ高さで接していたため、整地終了から、後期包含層の堆積が始まるまでの間に配されたと考えられる。土坑などを伴わないことから、礫は

予め平坦部を下に寝かせていましたと考えられる。

西日本の绳文後・晩期遺跡における配石遺構は、石ヶ坪遺跡（島根県邑南町）、水田ノ上A遺跡（同）などが知られている。また、藤平小出遺跡（鹿児島県南種子町）における、配石土坑群の中心部に配石が検出された例や（註5）、松添遺跡（宮崎市）（文献11）における、環状を呈する5基の「擂り鉢状の遺構」の中心に配石が行なわれた例は（註6）、どちらも配石下部に土坑を伴う点は異なるものの、レイアウト上類例に含まれよう。寺野東遺跡で検出された「石敷台状遺構」も、構成要素の大きさは異なるが、窪地遺構の中央部から検出された点では類例と考えられる。ただし、寺野東遺跡の場合は、検出地点が削り残され高まりが作り出されていることから、本遺跡とは順序が逆である。

豊穴状遺構

C区の4基は、いずれも遺構底面の凹凸が激しく、壁が判然としていたことから、豊穴住居とは異なる遺構と判断した。覆土は、いずれも炭や焼土の混入に乏しい。また、豊穴状の掘り込みが実際に柱を伴っていたかは定かでない。この遺構は、中央配石を取り囲むように検出されたことや、台付皿形土器や赤変の認められる大形の石錘などが出土したことから、祭祀に伴う遺構と推測される。類例には、前述の松添遺跡における擂り鉢状の遺構が挙げられるが、詳細は不明である。

環状土坑群

調査した部分は約半分であり、D区は検出作業で終了したため、具体的な数は定かでない。土坑の機能として、次の4種類を推定した。

1：径50cm以上、深さ50cm以上で、直に落ちる、若しくは断面の一部が袋状となる。遺構上部、または中部に石皿を伴う場合もある=土壤墓

2：径50cm以下、深さ50cm以下で、遺構上部に石皿を伴う=立石

3：平面形態や深さに関係なく、堅果類の炭化物を多く含む=貯蔵穴

第80図は、上記の特徴を遺構配置図に色別に示したものである。

立石は、環状土坑群の内側に多い。窪地遺構の北側から東側かけては分布が疎らであるが、写真図版12・13にあるように、これは検出作業中に除去した結果であり、調査時は多くの立石を検出している。なお、立石に用いられた砾の表面には、擦痕や敲打痕など、石皿とは異なる人為的な加工の痕跡が認められるものも多かった。

土壤墓は環状土坑群の外縁に幾つかのまとまりを持ちながら分布するが、このうち幾つかの土坑にはオーバーハングが認められ、当初は貯蔵穴として構築・使用した後に再利用したと考えられる。また、オーバーハングが認められなくても、関東地方で見られるように、再利用時にオーバーハング部を崩した可能性も考えられる（註7）。しかし、機能が特定できた遺構はまだ少数であり、多くは上記の分類に当てはまらないものであった。更に、貯蔵穴を再利用した墓壙の存在は、環状土坑群の形成が一次的かつ一面的でなかったことを示している。今後の資料整理では、これらを踏まえながら、更に考察を深めてゆきたい。

覆土からは、袋状土坑内で一括廃棄らしき遺物の集中も認められたが、それ以外は良好

な状態の出土例が少ない上に、無文土器が多くいたため、構築時期の把握は困難である。ただし、現在のところ市来式が多い傾向にある。

環状掘立柱建物群

環状土坑群の中で、径50cm以下、深さ50cm以上で、直に落ちる断面形を呈するものや、図面から配列が確認できるものは掘立柱建物の柱穴と判断した。遺構は、C区のみで9軒に上る。配置は、環状土坑群の弧に直交または平行しており、整地後、掘立柱建物で構成された集落が展開したと考えられる。この遺構はD区にも存在したと考えられることから、掘立柱建物群の配置は環状を呈していたと予想される。なお、前述したように、C区でも検出作業は不充分であったため、掘立柱建物の軒数は今回の想定より多くなる可能性が高い。ちなみに、柱穴と判断した土坑の中で配列が認められないものについては、掘立柱建物以外の機能を考える必要があろう。

道路状遺構

C区北西部とD区とF区の中間部分の2箇所から検出した。窪地遺構から、北北西と南に伸びる位置関係となる。

(道路状遺構-01) の周辺は、アカホヤ火山灰層が大きく入り込んだ位置にあることから、遺構は自然流路に沿って構築したと考えられる。上層と下層の中間に認められた牛のスネローム層のブロックは、硬い土を選んで敷設した結果と考えられる。覆土上層下位から出土した納屋向タイプは、遺構廃絶時に、土器廃棄を行ったためであろう。また、上層上位から出土した多量の土器小片は、残存状態の悪さから周辺からの流れ込みと考えられる。なお、遺構は北部を流れる元野川と遺跡を繋ぐ位置にあることから、構築の目的は、漁撈、物資や人の移動、水利等が考えられる。

(道路状遺構-02) は、北部の延長上には窪地遺構が存在しており、遺構同士が接していた可能性も考えられる。覆土には、北部のような敷設は認められなかつたが、遺構底面の小林硬化軽石が硬化面の役割を果たしていたと考えられる。遺構は、南側に傾斜しながら台地縁辺部の湧水点に続いていることから、遺構構築の目的は水利、人の移動等が考えられる。

縄文時代遺跡の道路状遺構は、南九州の縄文時代早期において、等高線の凹みの連続や硬化面が細長く続いていることから認定された例が知られている(文献11)が、本遺跡の道路状遺構は、アカホヤ火山灰層から明確に掘り込んでいるうえに、道路状遺構-01は敷設も行なわれるなど、規模も構造も異質である。三内丸山遺跡(青森県弘前市)(文献12)の検出例は、記述によると幅7mまたは12mとあり、遺構両脇に幕壙が検出されるなど、本野原遺跡とは明らかに異なる面も認められるが、構築にあたって敷設を行っていると言う点では類似といえる。なお、横峯遺跡でも可能性のある遺構が検出されたとの発表があり、窪地遺構と並ぶ類似点として注目される。

埋甕

(埋甕-01) は指宿式である。九州では、宮ノ前遺跡(福岡県前原市)における縄文後

期初頭の埋甕が最も古く（文献13）、それに次ぐ例といえる（註8）。一方、（埋甕-02）の粗製深鉢は晚期前葉から中葉にあたり、（埋甕-01）とは時期差が存在する。

出土遺物

本遺跡から主として出土した土器型式を時期別に表すと、岩崎式・指宿式→市来式→丸尾式→納屋向タイプとなる。磨消繩文系土器群の出土は、後期前葉の福田K2段階と後期後葉の西平式が少量であり、中間に属する鐘崎式・北久根山式の出土はわずか数点である。しかし、後期前葉に主体を占める指宿式は、磨消繩文土器の影響を受けて成立した土器であり、一時的かつ間接的ではあるが、外的要因を窺う事ができる。なお、市来式で成立した貝殻文系土器群は、時間の経過と共に、属性が磨消繩文系土器群に接近しながら（註9）後期末に途絶え、晚期は、黒色磨研土器が主体的に出土する。このような繩文後・晚期の土器の動態は、宮崎県央部に共通した傾向である。

出土石器からは、狩獵よりも漁撈、動物質食料よりも植物質食料に依存した生態を窺うことができる。ただし、遺跡の規模を考慮すれば、磨石も決して多いとはいえない、石器組成は貧弱である。

特殊遺物は、遺構内からノジュールが多く出土したほか、繩文時代の土製品としては珍しい鹿を模した土製品（文献14）が出土しているが、総点数は決して多いとはいえない。

本野原遺跡の変遷

通常、遺構の構築時期を推定するには、覆土からの出土土器が手がかりとなる。しかし、現在の南九州における繩文後期の土器編年は整備の途上にあり、特に中期末～後期初頭は混沌とした状況にある。そこで、現時点までの資料整理で得られた成果や、県央部における出土状況などを考慮し、以下のI～X期に細分を行った（註10）。

I期：凹線気味の沈線を持つ岩崎式、阿高式：中期後葉～中期末

II期：太い沈線を持つ岩崎式：中期末～後期初頭

III期：細い沈線を持つ岩崎式、指宿式：後期前葉

IV期：市来Ⅰ式：後期前葉～中葉

V期：市来Ⅱ式：後期中葉

VI期：丸尾Aタイプ：後期後葉

VII期：丸尾Bタイプ（註11）：後期後葉

VIII期：納屋向タイプ（註12）：後期末

IX期：黒色磨研土器：晚期末～晚期初頭

X期：黒色磨研土器：晚期前葉～中葉

次に、遺構から出土する遺物をそれぞれの時期に当てはめた上で、遺物の時期にまとまりが見られた遺構について、埋没時期を想定した。表27は、遺構を埋没時期別に纏めたものである。なお、遺構の時期決定は、遺物の出土が極めて貧弱なもの、幅がありすぎるものは不明としたが、少量でもまとまりが見られた場合は該当する時期に含めた。また、時期別の出土量は印象を記したのみであり、数値的裏付けによるものではない。

(I 期)

堅穴住居は2軒である。どちらもC区北部に位置しており、住居覆土上層に土器の一括廃棄が行われている。なお、包含層からの出土はごく僅かである。

(II 期)

堅穴住居は、他の時期と重複するものも含めると25軒に上る。しかし、堅穴住居同士が重なる場合も多いことから、更に細分される可能性を有している。堅穴住居の分布は、C区北部と東部の2箇所に分かれる。なお、この時期の土器は、北東部の緩傾斜面から大量に確認されるほか、包含層からも少量ながら遺物が出土する。

(III 期)

堅穴住居は、他の時期と重複するものも含めると36軒に上り、最も多くの堅穴住居が確認された時期である。しかし、堅穴住居同士が重なる場合も多いことから、更に細分される可能性を有している。堅穴住居は、II期で集中した北側が疎らになる一方、北側と東側の中間部分が多く分布する。このほか、C区北部では列状掘立柱建物群が構築され、南東部の傾斜面では土器の一括廃棄が、C区北東部の緩傾斜面上からは埋甕が行なわれた。包含層から最も多くの遺物が出土した時期でもある。

(IV 期)

堅穴住居は、他の時期と重複するものも含めて5軒であり、大幅な減少が見られる。分布は、東側堅穴住居群の西側に偏る。なお、環状土坑群はこの時期に構築されたものが多く、それに先だって、整地も行なわれたと考えられる。遺物包含層中の出土量も減少する。

(V 期)

堅穴住居は、他の時期と重複するものが1軒あるに過ぎない。環状土坑群からの出土遺物はこの時期のものが多い。包含層からの遺物の出土は、IV期より若干多くなる程度である。

(VI 期)

堅穴住居は0軒である。この時期の環状土坑群もV期に比べて減少する。しかし、堅穴状遺構のうち1基は、この時期から構築された可能性があるほか、窪地遺構の検出面から遺物が出土しており、窪地遺構内の埋没が始まった時期と考えられる。包含層からの出土は、V期と比較すると増加傾向にある。

(VII 期)

堅穴住居は0軒であるが、窪地遺構検出面からは多くの遺物が出土している。堅穴状遺構の殆どはこの時期にあたる。包含層からの出土は少量である。

(VIII 期)

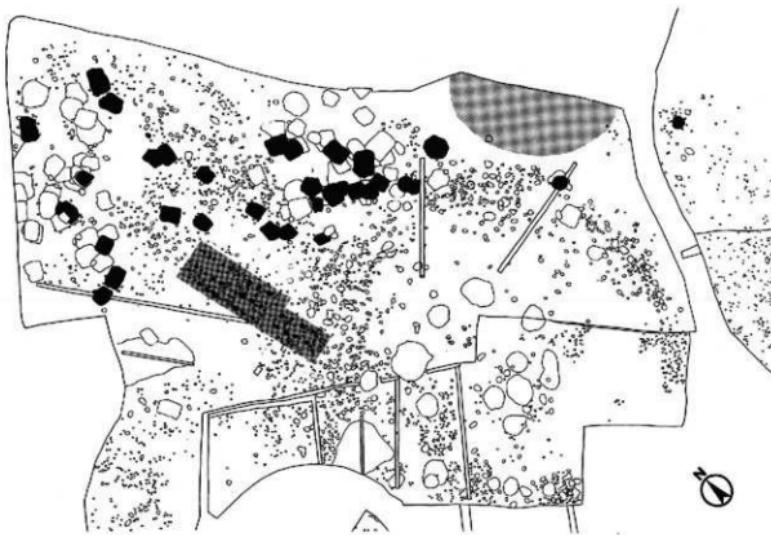
堅穴住居は0軒であるが、VII期に続き、窪地遺構内から多くの遺物が出土しており、窪地遺構内の埋没が一層進んだ時期と考えられる。また、道路状遺構-01は、この時期に埋没する。包含層からの出土も多い。



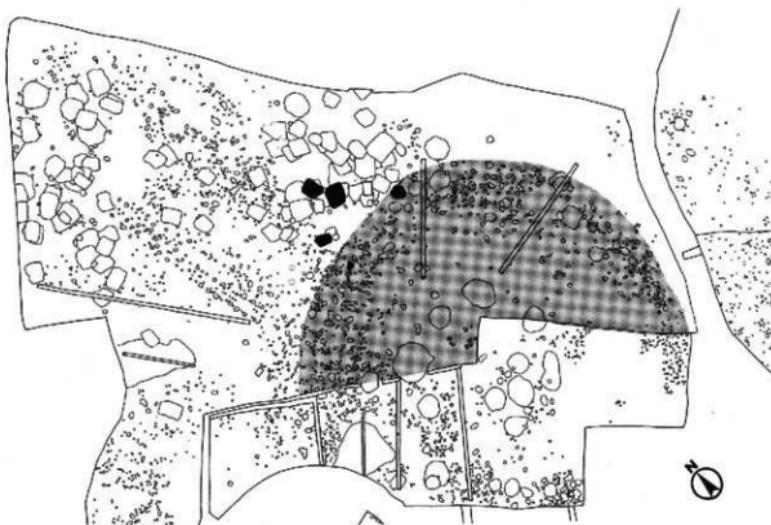
第90図 調査区内遺構の変遷図(Ⅰ期)



第91図 調査区内遺構の変遷図(Ⅱ期)



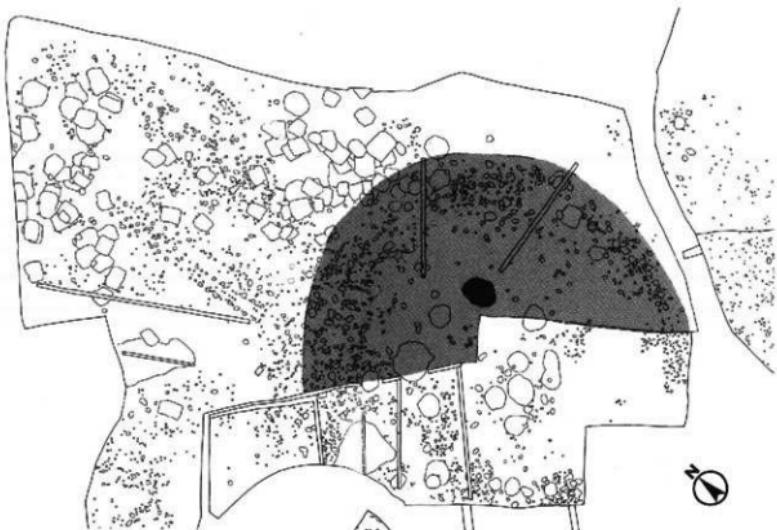
第92図 調査区内遺構の変遷図（Ⅱ期）



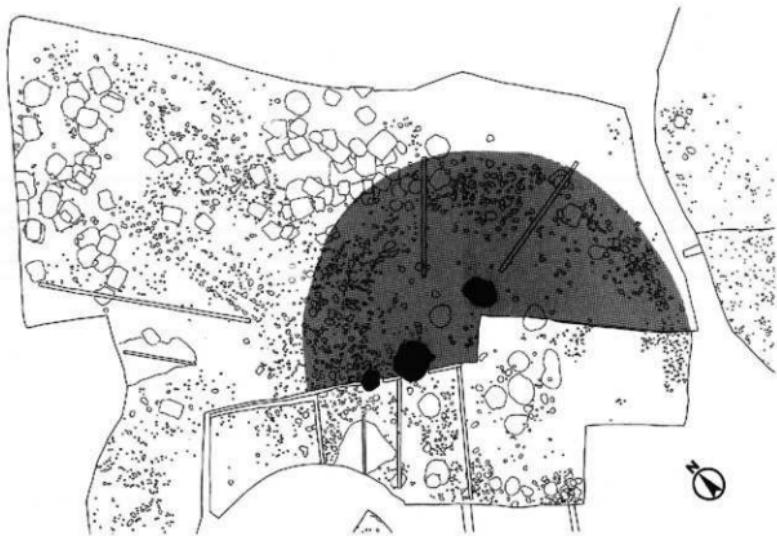
第93図 調査区内遺構の変遷図（Ⅳ期）



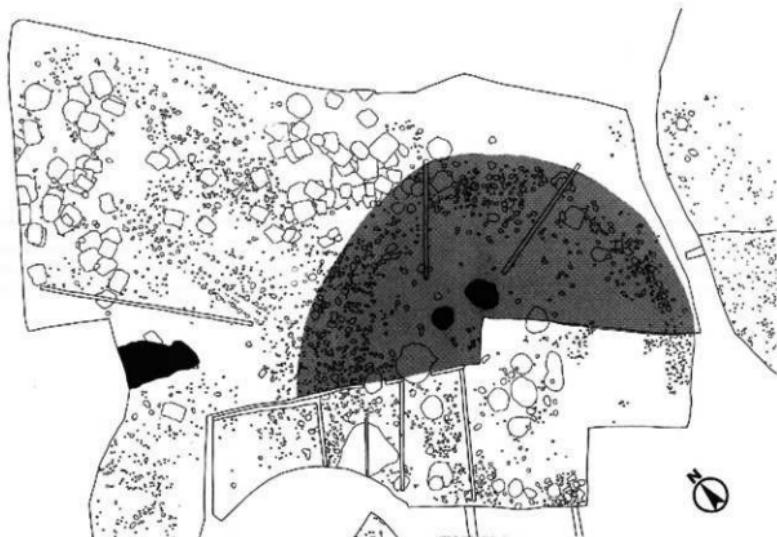
第94図 調査区内遺構の変遷図（V期）



第95図 調査区内遺構の変遷図（VI期）



第96図 調査区内遺構の変遷図（VII期）



第97図 調査区内遺構の変遷図（VII期）



第98図 調査区内遺構の変遷図（IX期）



第99図 調査区内遺構の変遷図（X期）



第100図 元野地区後期集落の分布図

表27 遺構構築時期照合表

	堅穴住居			列状掘立柱建物群	堅穴状遺構	その他の遺構			特徴や変化		
I期	SA-72 SA-86								・住居内において土器の一括廻棄が行なわれる。		
II期	SA-05 SA-08 SA-15 SA-17 SA-19 SA-42 SA-47 SA-49 SA-52 SA-54 SA-56 SA-57	SA-60 SA-66 SA-67 SA-68 SA-69 SA-70 SA-76 SA-78 SA-88 SA-100 SA-102	SA-26 SA-31 SA-34	S A S 4 A 5 S A 5 1	SB-03 SB-04 SB-05	南 東 部 土 器 廻 棄	埋 壘	1 0 1	・堅穴住居が大幅に増加。 ・北側と東側に堅穴住居の分布が集中する。		
III期	SA-01 SA-03 SA-07 SA-11 SA-12 SA-13 SA-21 SA-22 SA-23 SA-24 SA-25 SA-27 SA-28 SA-29	SA-36 SA-37 SA-40 SA-41 SA-43 SA-44 SA-46 SA-48 SA-53 SA-58 SA-63 SA-83 SA-87 SA-107	SA-35 SA-77 SA-98 SA-99	A S 4 A 5 S A 5 1	SB-03 SB-04 SB-05	南 東 部 土 器 廻 棄	中 央 配 石	盛 地 遺 構 の 維 持	・列状掘立柱建物群の構築 ・堅穴住居の軒数が頂点を迎える ・南東部の傾斜面上において土器の一括廻棄が行なわれる ・東側に堅穴住居の分布が多くなる		
IV期	SA-06 SA-38			1		中 央 配 石	盛 地 遺 構 の 維 持	・整地が完了する ・南東部の傾斜面上や東側堅穴住居群上に土盛りが行われる ・堅穴住居の激減。			
V期						中 央 配 石	盛 地 遺 構 の 維 持				
VI期						S X 0 5	盛 地 遺 構 の 堆 積	・盛地遺構の埋没が始まる			
VII期					SX-02 SX-03 SX-04						
VIII期											
IX期								・集落の中心が西の範囲確認調査部へ、更に北の高野原遺跡へと移動する			
X期	SA-90 SA-97						埋 壘 1 0 2	・再び堅穴住居が構築される			

(IX期)

範囲確認調査部において多くの遺物・遺構が確認されたことから、集落の中心が完全に移動した時期と考えられる。この時期、A~F区内に遺構は確認されていない。

(X期)

遺跡範囲確認調査部からの出土が減少した時期である。一方、川を挟んで北岸の高野原遺跡からは、竪穴住居と掘立柱建物で構成される集落が展開したことが明らかとなっている。なお、やや時期を離れて、調査区内では北側住居群に竪穴住居が2軒認められ、周囲からも土坑が数基検出された。窪地遺構内からは埋甕が1基検出されたほか、堆積層からも遺物が一定量出土するなど、再び集落が形成された。しかし、この時期を下限として、台地内からは遺構・遺物共に完全に姿を消す。

本野原遺跡は、中期後葉から集落が出現し、北側から東側へと竪穴住居の分布が移動しながら軒数が増加し、Ⅲ期にはピークを迎える。この時期、C区北部では列状掘立柱建物群が構築され、南東傾斜面では土器が一括廃棄された。Ⅳ期は、C区南部で大規模な土木工事を行い、環状土坑群を構築した一方で、竪穴住居は激減し、包含層中の遺物も減少する。元野地区内にまとめて出土した地点は確認されていないが、出土遺物を全て持ち込みと考えるのは無理が伴うことから、現時点では、①既に削平された、調査区東部にある谷の対岸の斜面上、②環状掘立柱建物群、③盛土遺構上を、集落の候補地として挙げておきたい。Ⅵ期からは窪地遺構の埋没が始まるが、竪穴状遺構の構築はⅦ期前後であるため、遺構埋没中も、窪地遺構は祭祀的空間と認識されていたようである。Ⅸ期に西側へ移動した集落は、その後、川を挟んで北岸に位置する高野原遺跡B・C区に移動したと考えられる。しかし、その集落も一時的であり、X期には調査区北側において竪穴住居が姿を現し、調査区内は小規模ながら再び集落地となる。遺物は、窪地遺構内からも多く出土し、埋甕も検出されている。なお、X期は南側の畑田遺跡において組織痕土器が出土している。

このように、I・II期は多数の竪穴住居を主体としているが、遺構の分布は不規則である。しかし、III期以降の遺構分布は、環状を意識した配置がされており、集落景観は一変する。この背景には、繩文後期初頭から前葉にかけて、西日本全体に大きな影響を与えた、いわゆる「東日本縄文文化複合体」の伝播が考えられよう。検出遺構から窺える様相は、これまで考えられてきた以上に文化的影響が大きかったことを示している。また、遺跡範囲確認調査トレンチの土層堆積は、土木工事の可能性が考えられ、集落の変遷を知る上で極めて重要といえよう。

(註)

- 註1：なお、村野原遺跡（熊本県相良村）で検出された中央土坑+両脇ピットの内部構造を作り堅穴住居にも、硬化面や貼床は認められなかった（文献15）。調査結果の発表において、担当者は堅穴住居の使用期間と共に、床面に何らかの敷物が存在した可能性を示唆している。
- 註2：ここでは、土木工事を行うにあたり、浅い掘り鉢状に土地を削る行為を「整地」、それにより生じた地形を「窪地遺構」、整地で生じた堆土を周辺に積み上げる行為を「土盛り」、それにより生じた状態を「盛土遺構」、そして、窪地遺構と盛土遺構を併せて「土木工事」と呼称する。また、時代不明の土層消失は、単に「削平」とした。
- 註3：土木工事に要した期間については、現在のところ不明である。
- 註4：高哲朗氏の御教示による。
- 註5：黒川忠広氏の御教示による。
- 註6：なお、遺構の周囲は、高密に分布する縄が突然希薄になるなど、土木工事を思わせる検出状況を見ることができる。
- 註7：初山孝行氏の御教示による。
- 註8：近年、鹿児島県で報告されている竜形土器の埋納は縄文早期にあたるが、埋甕とは異なる系統の遺構という認識から、これに含めなかつた。
- 註9：こうした貝殻文系土器の磨消縄文系土器への接近は、前追亮一氏により既に述べられている（文献16）。ただし、宮崎県中央部の磨消縄文土器の受容は鹿児島県よりも消極的であり、磨消縄文系に移行する時期も遅い。
- 註10：ただし、遺構断面の前後関係が、出土遺物の時期から推定した前後関係と合致しない場合も見られる。また、黒色磨研土器もいくつかの型式に分類が可能である。こうした問題は、今後更なる検討を重ねた上で、改めて報告を行う予定である。
- 註11：丸尾AタイプとBタイプは、現在単独で型式設定されておらず、時期差とも認識されていない。しかし、本遺跡や周辺の縄文後期遺跡の出土状況をみると、2つのタイプの違いは時期差に起因すると考えられる。この内容については、改めて報告を行う予定である。
- 註12：納屋向タイプの中には、竹ノ内遺跡において納甕式とされた一群も含めた。納屋向タイプの貝殻刺突文が沈線に置換されたものであると判断したためである。

(参考文献)

- 文献1：田野町教育委員会2001「元野河内遺跡」「田野町文化財調査報告書」第39集
- 文献2：田野町教育委員会2004「黒東第2遺跡」「田野町文化財調査報告書」第49集
- 文献3：田野町教育委員会2000「高野原遺跡（E～G区）」「田野町文化財調査報告書」第36集
- 文献4：秋成雅博・藤木聰・松本茂 2003「宮崎県域における旧石器資料の再検討（1）」
『古文化談層』第50集（中）
- 文献5：田野町教育委員会1999「本野遺跡（縄文時代遺物編）」「田野町文化財調査報告書」第32集

文献6：水之江和同2002「九州の縄文集落」「犬飼徹夫先生古稀記念論集」

なお水之江氏は、この住居構造が北部九州の晩期中葉でも認められたと他者の記述も紹介している。時と地域を異にした両者の関連性は、今後注目されよう。

文献7：江原 英1999「寺野東遺跡環状盛土遺構の類例」『研究紀要』第7号

文献8：上村俊雄・中國聰・大西智和・金子愛2003

「屋久島横峯遺跡5次調査の成果—縄文時代後期集落の整地の可能性をめぐって—」

『人類史研究会第14回大会発表予稿集』

文献9：上村俊雄・中國聰・大西智和・金子愛2003

「屋久島横峯遺跡の調査—屋久島における縄文時代後期集落遺跡—」『同上』

文献10：田野町教育委員会1990「丸野第2遺跡」「田野町文化財調査報告書」第11集

文献11：紫昌正幸2003「遺跡と遺跡—南九州の縄文時代早期を中心として—」

『研究紀要 縄文の森から』創刊号

文献12：『青森県史 別編 三内丸山遺跡』2002 青森県史編さん考古部会

文献13：坂本嘉弘 1994「埋壺から壺棺へ—九州縄文埋壺考—」『古文化談叢』第32集

文献14：泉 拓良・西田泰民責任編集1999『縄文世界の一万年』集英社

文献15：出合宏光2000「山間部における縄文時代後期集落遺跡の調査について」

『肥後考古学会第218回例会発表資料』

文献16：前迫亮一2002「南の唐津縄文土器」「犬飼徹夫先生古稀記念論集」



集石遺構検出状況（B区）



集石遺構検出状況（C区）



SI - 01 検出状況



SI - 02 検出状況



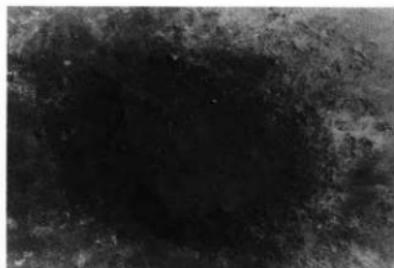
SI - 03 検出状況



SI-04 検出状況



SI-04 底石検出状況



SI - 04 挖出状況



SI - 05 検出状況



SI - 06 検出状況



SI - 07 検出状況



SI - 09 検出状況



SI - 11 検出状況



SI - 06・07 検出状況



SI - 13・14 検出状況



SI - 14 検出状況



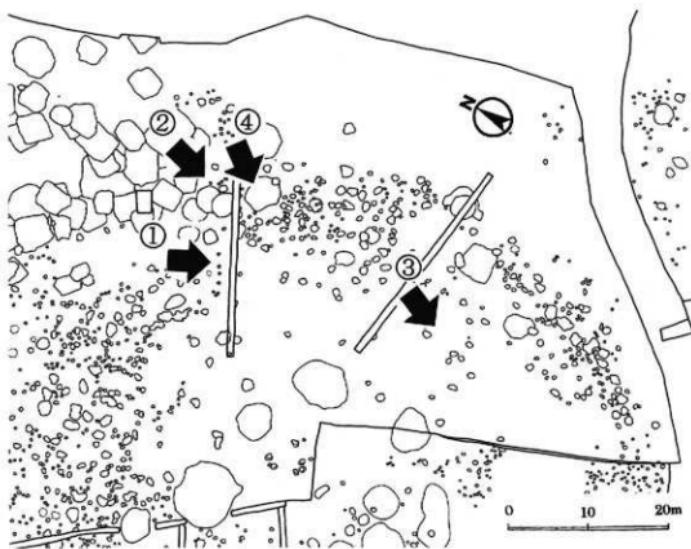
SI - 08 検出状況



SI - 12 検出状況



SI - 13 検出状況



環状土坑群検出状況（①）